

5.12 動 物

5.12.1 陸域動物

(1) 調 査

(a) 調査概要

事業計画地及びその周辺における陸域動物（陸域動物及び淡水の水生生物を含む）の状況を把握するため、資料調査及び現地調査を実施した。

資料調査の内容は表 5.12.1 に、収集・整理を行った既存資料は表 5.12.2 に、既存資料の調査地点及び範囲は図 5.12.1 にそれぞれ示すとおりである。また、現地調査の内容は表 5.12.3 に、現地調査期間は表 5.12.4 に、現地調査地点及び範囲は図 5.12.2 にそれぞれ示すとおりである。

なお、重要な種の選定基準は、表 5.12.5 に示すとおりである。

表 5.12.1 資料調査の内容

調査項目	調査方法
○陸域動物の生息状況等	事業計画地及びその周辺における陸域動物の生息状況等に関する既存資料の収集・整理

表 5.12.2(1) 既存資料

No.	既存資料名	対象分類群					対象データの範囲
		哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	昆虫類	
1	「第2回自然環境保全基礎調査」(環境庁、昭和55～57年)	○	○			○	事業計画地を含むメッシュ
2	「第3回自然環境保全基礎調査」(環境庁、昭和63年)		○				事業計画地を含むメッシュ
3	「第4回自然環境保全基礎調査」(環境庁、平成5～7年)	○		○	○	○	事業計画地を含むメッシュ
4	「第5回自然環境保全基礎調査」(環境庁、平成13～14年)	○		○	○	○	事業計画地を含むメッシュ
5	「第6回自然環境保全基礎調査」(環境省、平成16年)	○					事業計画地を含むメッシュ
6	環境省ホームページ「モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査」(2004～2020 データセット、令和5年5月閲覧)		○				大阪南港野鳥園、大阪北港南地区
7	国土交通省水情報国土データ管理センターホームページ「河川環境データベース 河川水辺の国勢調査」(平成7～28年度分、令和5年5月閲覧)	○	○	○	○	○	淀川の「淀淀淀1(淀川河口～菅原城北大橋)」の区間
8	「平成30年度 野鳥園臨港緑地干潟・湿地環境保全事業 事業報告書」(大阪市、平成31年)		○				野鳥園全域と、展望塔から目視可能な海上を含む範囲
9	「大阪湾生き物一斉調査 情報公開サイト」(大阪湾環境データベース(近畿地方整備局神戸港湾空港技術調査事務所)、平成24～令和3年度分、令和5年5月閲覧)		○	○	○	○	天保山、野鳥園臨港緑地
10	「大阪港新島地区埋立事業及び大阪沖埋立処分場建設事業に係る事後調査報告書」(国土交通省近畿地方整備局、大阪港湾局、大阪湾広域臨海環境整備センター、平成26年5月分～令和4年8月分)		○				報告書に示された、舞洲、夢洲、咲洲、南港南6丁目の各1地点における定点調査範囲

表 5. 12. 2 (2) 既存資料

No.	既存資料名	対象分類群					対象データの範囲
		哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	昆虫類	
11	「メッシュマップ大阪市の生き物:分野別調査報告書」(大阪市、平成10年)	○	○	○	○	○	港区、此花区、住之江区を含むメッシュ
12	「大阪の生物多様性ホットスポットー多様な生き物たちに会える場所ー」(大阪府、平成28年)		○				南港野鳥園・夢洲
13	「第52回ガンカモ類の生息調査報告書(令和2年度)」(環境省、令和4年)		○				港区、此花区、住之江区に含まれる11調査地点
14	「2025年日本国際博覧会環境影響評価書」(公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、令和4年6月)	○	○	○	○	○	夢洲の2025年日本国際博覧会会場予定地、舞洲の駐車場予定地
15	「2025年日本国際博覧会」私たちからの環境影響評価準備書(生物多様性編)第2版(公益社団法人大阪自然環境保全協会/NPO地域づくり工房、令和3年11月)		○				夢洲の一部

(注) 既存資料No.14は、公益社団法人2025年日本国際博覧会協会提供資料を含む。



図 5.12.1 既存資料の調査地点及び範囲

表 5.12.3 現地調査の内容

調査項目	調査範囲	調査時期 及び頻度	調査方法
動物相の状況 (哺乳類)	事業計画地及びその周辺 (250m)	4回/年 ・春季 ・初夏 ・秋季 ・冬季	任意調査（フィールドサイン法） 事業計画地及びその周辺の陸域を任意に踏査し、糞や足跡等の痕跡、出現する哺乳類の種名を記録する。
			トラップ法（シャーマントラップ3地点） 中に餌を入れたシャーマントラップを1地点あたり10個設置し、捕獲される哺乳類の種名・個体数を記録する。
動物相の状況 (鳥類)		6回/年 ・春の渡り期 ・繁殖期前期 ・繁殖期後期 ・秋の渡り期前期 ・秋の渡り期後期 ・越冬期	ラインセンサス法（3ルート） 事業計画地及びその周辺の陸域に設定した定線をゆっくりと歩行し、出現する鳥類の種名及び個体数を記録する。
			ポイントセンサス法（4地点） 事業計画地及びその周辺の陸域に設定した定点において、満潮と干潮を含む時間帯に複数回の観察を行い、出現する鳥類の種名及び個体数を記録する。
			直接観察法 事業計画地及びその周辺の陸域を任意に踏査し、出現する鳥類の種名を記録する。 繁殖期前期及び繁殖期後期の調査においては、営巣場所調査を実施し、事業計画地及びその周辺の陸域における鳥類の営巣状況を把握する。
動物相の状況 (両生類・爬虫類)		3回/年 ・春季 ・初夏 ・秋季	直接観察法 事業計画地及びその周辺の陸域を任意に踏査し、出現する両生類・爬虫類の種名を記録する。
動物相の状況 (昆虫類)		3回/年 ・春季 ・夏季 ・秋季	任意採取法（直接観察法） 事業計画地及びその周辺の陸域を任意に踏査し、出現する昆虫類の種名を記録する。
			トラップ法（ライトトラップ3地点） ライトトラップ（ボックス法）を1地点あたり1器設置し、捕獲される昆虫類の種名・個体数を記録する。
			トラップ法（ベイトトラップ3地点） ベイトトラップ（乳酸菌飲料及び発酵飲料を混合した誘引餌等を入れたプラスチックカップ）を1地点あたり20個設置し、捕獲される昆虫類の種名・個体数を記録する。
水生生物の状況 (魚類)	事業計画地及びその周辺 (250m)	2回/年 ・春季 ・夏季	任意採集（内水面1地点） 調査範囲内の内水面において、投網、タモ網、セルビン等から環境に適した漁具を選択し、捕獲される魚類の種名を記録する。
水生生物の状況 (底生動物)			任意採集（内水面1地点） 調査範囲内の内水面において、タモ網等を用い、捕獲される底生動物の種名を記録する。
			コドラート法（内水面1地点） 50cm×50cmのコドラートを設置し、捕獲される底生動物の種類・個体数を記録する。
重要な種、その生息地の分布及び特徴		—	動物相の調査結果から重要な種を抽出し、重要な種の採餌場所、繁殖場所、休息場所、移動経路等の生息地の分布状況及び特徴を整理する。

(注) 1. 調査期間は、表 5.12.4 に示すとおりである。

2. 重要な種の選定基準は、表 5.12.5 に示すとおりである。

表 5.12.4 現地調査期間

調査項目	調査方法	調査地点及び範囲	調査期間
哺乳類	フィールドサイン法	事業計画地及びその周辺 (250m)	春季：令和2年5月26～27日 初夏：令和2年6月25～26日
	トラップ法	事業計画地内の3地点	秋季：令和2年10月5～6日 冬季：令和3年1月12～13日
鳥 類	ラインセンサス法	事業計画地及びその周辺 の3ルート	春の渡り期：令和2年4月27～28日 繁殖期前期：令和2年5月28～29日
	ポイントセンサス 法	事業計画地内の4地点	繁殖期後期：令和2年6月26～27日 秋の渡り期前期：令和2年9月24～25日
	直接観察法	事業計画地及びその周辺 (250m)	秋の渡り期後期：令和2年10月29～30日 越冬期：令和3年1月6～7日
両生類・ 爬虫類	直接観察法	事業計画地及びその周辺 (250m)	春季：令和2年5月26～27日 初夏：令和2年6月25～26日 秋季：令和2年10月5～6日
昆虫類	任意採取法	事業計画地及びその周辺 (250m)	春季：令和2年5月26～27日
	ライトトラップ法	事業計画地内の3地点	夏季：令和2年7月29～30日
	ベイトトラップ法		秋季：令和2年10月5～6日
魚類	任意採取法	事業計画地外の1地点	春季：令和2年5月25日 夏季：令和2年7月29日
底生動物	任意採取法	事業計画地外の1地点	春季：令和2年5月25日
	コドラート法		夏季：令和2年8月19日

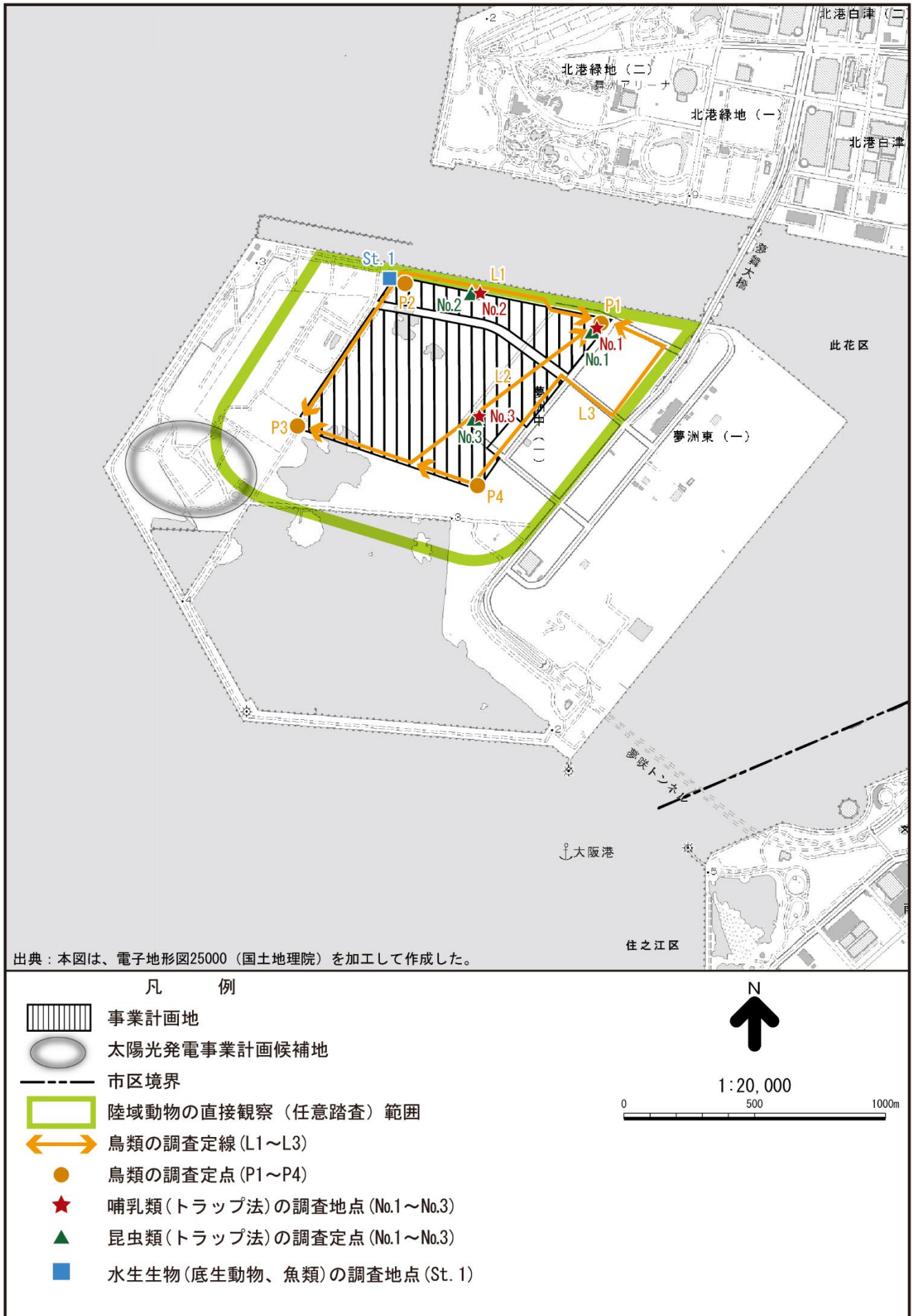


図 5. 12. 2 現地調査地点及び範囲

表 5.12.5 重要な種の選定基準

No.	略称	法律・条令、文献等	選定基準となる区分
①	文化財	文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）	特：特別天然記念物 天：国指定天然記念物
		大阪府文化財保護条例（昭和 44 年条例第 5 号）	府：府指定天然記念物
		大阪市文化財保護条例（平成 11 年条例第 5 号）	市：市指定天然記念物
②	保存法	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号）	国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種 緊急：緊急指定種
③	国 RL	環境省レッドリスト 2020（環境省、令和 2 年 3 月）	EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧ⅠA類 EN：絶滅危惧ⅠB類 CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域 個体群
④	府 RL	大阪府レッドリスト 2014（大阪府、平成 26 年 10 月）	EX：絶滅 CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足
⑤	近畿	鳥類のみ：「近畿地区・鳥類レッドデータブックー 絶滅危惧種判定システムの開発」（江崎保男、和田 岳編著、平成 14 年 3 月）	〔評価個体群の区分〕 繁殖：繁殖個体群 越冬：越冬個体群 夏季：夏季滞在個体群 通過：通過個体群 〔カテゴリー〕 ランク 1：危機的絶滅危惧種 2：絶滅危惧種 3：準絶滅危惧種 注：要注目種

(b) 調査結果

(7) 資料調査結果

事業計画地及びその周辺における資料調査の結果から確認された種は表 5.12.6 に示すとおりであり、哺乳類は4目6科9種、鳥類は16目45科189種、爬虫類2目5科5種、両生類1目3科5種、昆虫類18目239科941種が確認されている。このうち重要な種に該当する種は表 5.12.7 に示すとおりであり、140 種が確認されている。

表 5.12.6 資料調査結果

分 類	確認種数	主な確認種
哺乳類	4 目 6 科 9 種	モグラ属、アブラコウモリ、ハタネズミ、カヤネズミ、ハツカネズミ、ヌートリア、タヌキ、ノイズ、イタチ属
鳥 類	16 目 45 科 189 種	ヒドリガモ、カルガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、コチドリ、シロチドリ、チュウシヤクシギ、アオアシシギ、トウネン、コアジサシ、トビ、モズ、ハシブトガラス、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ムクドリ、イソヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ等
爬虫類	2 目 5 科 5 種	ミシシippアカミガメ、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ
両生類	1 目 3 科 5 種	ニホンアマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ツチガエル、ヌマガエル
昆虫類	18 目 239 科 941 種	アオモンイトトンボ、シオカラトンボ、ウスバキトンボ、ハラビロカマキリ、ツユムシ、エンマコオロギ、トノサマバッタ、クマゼミ、ウズラカメムシ、アメンボ、チャバネセセリ、ツバメシジミ、ヤマトシジミ本土亜種、アカタテハ、アオスジアゲハ、モンキチョウ、モンシロチョウ、ホソヒラタアブ、セアカヒラタゴミムシ、ハイイロゲンゴロウアオドウガネ、セマダラコガネ、ナナホシテントウ、ナミテントウ、ヨモギハムシ等

表 5. 12. 7(1) 資料調査により確認された重要な種（哺乳類）

No.	種 名	既存資料番号							重要な種の選定基準			
		1	3	4	5	7	11	14	①	②	③	④
1	ハタネズミ					○						CR+EN
2	カヤネズミ							○				NT

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（河川環境データベース、令和4年11月）に準拠した。

2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。

表 5. 12. 7(2) 資料調査により確認された重要な種（鳥類その1）

No.	種 名	既存資料番号													重要な種の選定基準				
		1	2	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	①	②	③	④	⑤	
1	ツクシガモ			○		○		○			○	○	○				VU	越冬:2	
2	ヨシガモ											○	○					越冬:3	
3	アメリカヒドリ					○												越冬:3	
4	マガモ					○	○	○			○	○	○					繁殖:3	
5	シマアジ											○	○					通過:3	
6	ホオジロガモ							○			○	○	○					越冬:3	
7	ミコアイサ					○		○			○		○					越冬:3	
8	カワアイサ												○					越冬:3	
9	ウミアイサ					○		○			○	○	○				NT	越冬:3	
10	カンムリカイツブリ					○		○	○			○	○					繁殖:3	
11	コウノトリ					○								特	国内	CR			
12	ヨシゴイ								○							NT		繁殖:2	
13	ササゴイ					○												繁殖:3	
14	アマサギ					○							○				VU		
15	チュウサギ					○		○					○			NT		繁殖:3	
16	ヘラサギ			○		○						○	○			DD			
17	クロツラヘラサギ			○		○		○							国内	EN			
18	クイナ					○											NT	越冬:2	
19	ヒクイナ												○			NT	VU	繁殖:2	
20	オオバン					○		○	○				○	○				繁殖:3	
21	ホトトギス					○												繁殖:3	
22	ツツドリ					○											NT	繁殖:3	
23	タゲリ			○		○							○	○			NT	越冬:3	
24	ケリ			○		○							○	○		DD	NT		
25	ムナグロ			○		○		○					○	○			VU	通過:3	
26	ダイゼン			○		○		○					○	○			VU	通過:2	
27	イカルチドリ			○		○								○			VU	繁殖:3	
28	コチドリ			○		○	○	○	○				○	○			NT	繁殖:3	
29	シロチドリ			○		○	○	○	○		○		○	○		VU	VU	繁殖:3	
30	メダイチドリ			○		○		○					○	○		国際		VU 通過:3	
31	オオメダイチドリ			○		○		○								国際		NT 通過:2	
32	セイタカシギ			○		○		○					○	○			VU		
33	ヤマシギ			○									○					越冬:3	
34	オオジシギ			○												NT	NT	通過:3	
35	タシギ			○		○							○	○			NT	越冬:3	
36	シベリアオオハシシギ			○												DD			
37	オグロシギ			○		○		○					○				NT	通過:2	
38	オオソリハシシギ			○		○	○	○					○	○			VU	VU 通過:3	
39	チュウシャクシギ			○		○		○	○	○			○	○				NT 通過:3	
40	ダイシャクシギ			○		○		○									NT	通過:2	
41	ホウロクシギ			○		○		○						○		国際	VU	NT 通過:2	
42	ツルシギ			○		○		○					○	○			VU	VU 通過:3	
43	アカアシシギ			○		○		○		○				○			VU	NT 通過:2	
44	コアオアシシギ			○		○							○	○				NT 通過:2	
45	アオアシシギ			○		○		○		○			○	○				VU 通過:3	
46	カラフトアオアシシギ			○												国内	CR		
47	クサシギ			○		○		○										NT 越冬:3	
48	タカブシギ			○		○							○	○			VU	VU 通過:3	
49	キアシシギ			○		○		○					○	○				NT 通過:3	
50	ソリハシシギ			○		○		○					○	○				VU 通過:3	

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥学会、平成24年9月）に準拠した。

2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。

表 5. 12. 7(3) 資料調査により確認された重要な種（鳥類その2）

No.	種名	既存資料番号														重要な種の選定基準				
		1	2	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	①	②	③	④	⑤		
51	イソシギ			○		○		○				○	○				NT	繁殖:2		
52	キョウジョシギ			○		○		○				○	○				VU	通過:3		
53	オバシギ			○		○		○					○		国際		VU	通過:2		
54	コオバシギ			○		○									国際		NT	通過:2		
55	ミユビシギ			○				○				○	○				NT	通過:2		
56	トウネン			○		○		○		○		○	○				NT	通過:3		
57	オジロトウネン			○								○					NT	通過:2		
58	ヒバリシギ			○								○					VU	通過:2		
59	ウズラシギ			○		○		○				○	○				VU	通過:3		
60	サルハマシギ			○								○	○		国際		NT	通過:2		
61	ハマシギ			○		○		○				○	○			NT		越冬:3		
62	ヘラシギ			○											国内	CR		通過:2		
63	キリアイ			○		○		○				○	○				NT	通過:2		
64	エリマキシギ			○		○				○		○	○				NT	通過:2		
65	ツバメチドリ			○				○				○	○			VU	CR+EN	通過:2		
66	ズグロカモメ			○								○				VU	NT	越冬:2		
67	ウミネコ					○		○	○			○						繁殖:注		
68	オオセグロカモメ					○		○					○			NT				
69	コアジサシ					○	○	○	○	○		○	○			VU	CR+EN	繁殖:2		
70	ベニアジサシ									○						VU	NT			
71	ハジロクロハラアジサシ							○					○					通過:3		
72	ミサゴ					○		○				○	○			NT		繁殖:2		
73	チュウヒ					○				○		○	○		国内	EN	CR+EN	繁殖:1		
74	ハイイロチュウヒ					○		○		○							NT	越冬:2		
75	ハイタカ					○						○				NT		繁殖:注		
76	オオタカ					○							○			NT	NT	繁殖:3		
77	ノスリ					○		○					○				NT	越冬:3		
78	トラフズク								○									越冬:2		
79	コミミズク											○					VU	越冬:2		
80	カワセミ					○			○			○						繁殖:3		
81	アリスイ					○												越冬:3		
82	チョウゲンボウ					○		○				○	○					越冬:3		
83	ハヤブサ					○		○	○			○	○		国内	VU		繁殖:3		
84	サンショウクイ					○										VU	VU	繁殖:3		
85	サンコウチョウ					○												繁殖:3		
86	キクイタダキ								○									越冬:3		
87	ヒバリ				○		○	○	○			○	○				NT			
-	メボソムシクイ上種								○			○						繁殖:3		
88	オオムシクイ					○						○						繁殖:3		
89	メボソムシクイ					○												繁殖:3		
90	エゾムシクイ					○						○						繁殖:3		
91	センダイムシクイ					○		○				○					NT	繁殖:3		
92	オオヨシキリ					○		○	○			○	○				NT	繁殖:3		
93	セッカ					○	○	○	○			○	○				NT			
94	ミソサザイ					○												繁殖:3		
95	コムクドリ					○						○	○					通過:3		
96	マミジロ					○												繁殖:3		
97	トラツグミ					○											NT	繁殖:2		
98	クロツグミ					○												繁殖:3		
99	コマドリ					○												繁殖:3		
100	コルリ					○												繁殖:3		
101	ルリビタキ					○												繁殖:3		
102	ノビタキ					○						○	○					繁殖:3		
103	エゾビタキ					○						○						通過:3		
104	コサメビタキ					○		○				○				VU				
105	キビタキ					○			○			○						繁殖:3		
106	オオルリ					○			○			○						繁殖:3		
107	ホオアカ											○					NT	繁殖:3		
108	ミヤマホオジロ					○											NT	越冬:3		
109	アオジ					○		○	○			○	○					繁殖:3		
110	クロジ					○												繁殖:3		
111	オオジュリン					○		○	○			○	○				NT			

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥学会、平成24年9月）に準拠した。
2. 重要な種の選定基準は、表5.12.5に示すとおりである。

表 5. 12. 7(4) 資料調査により確認された重要な種（両生類）

No.	種 名	既存資料番号						重要な種の選定基準			
		3	4	7	9	11	14	①	②	③	④
1	トノサマガエル						○			NT	NT
2	ツチガエル					○					NT

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（河川環境データベース、令和4年11月）に準拠した。

2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。

表 5. 12. 7(5) 資料調査により確認された重要な種（昆虫類）

No.	種 名	既存資料番号							重要な種の選定基準			
		1	3	4	7	9	11	14	①	②	③	④
1	アオヤンマ	○									NT	VU
2	コフキトンボ							○				NT
3	ナツアカネ						○					NT
4	アキアカネ				○		○	○				NT
5	ナニワトンボ	○									VU	VU
6	ノシメトンボ				○		○					NT
7	マイコアカネ				○			○				NT
8	コヒゲジロハサミムシ				○							CR+EN
9	ムモンミズカメムシ							○				NT
10	コオイムシ							○			NT	NT
11	ヌマベウスキョトウ				○						VU	NT
12	ハマベミズギワゴミムシ				○							NT
13	キバネキバナガミズギワゴミムシ				○						VU	VU
14	マルガタゲンゴロウ		○	○						国内	VU	CR+EN
15	ケシゲンゴロウ		○	○				○			NT	NT
16	スジヒラタガムシ							○			NT	NT
17	コガムシ							○			DD	NT
18	コガタガムシ							○			VU	CR+EN
19	チャイロムナボソコメツキ							○				NT
20	ツシマヒメサビキコリ							○				NT
21	カワイヒラアシコメツキ							○				DD
22	ジュウクホシテントウ				○			○				NT
23	モンズズメバチ							○			DD	
24	キアシハナダカバチモドキ				○						VU	
25	キバラハキリバチ							○			NT	

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（河川環境データベース、令和4年11月）に準拠した。

2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。

(イ) 現地調査結果

(i) 哺乳類の状況

哺乳類の調査結果は表 5.12.8 に示すとおりであり、春季調査、初夏調査は 2 目 3 科 3 種、秋季調査、冬季調査は 2 目 2 科 2 種、合計で 2 目 3 科 3 種の哺乳類が確認された。事業計画地内、事業計画地外ともに 3 種の哺乳類が確認された。

現地調査範囲は埋立地であり、草地や裸地等の環境が大部分を占めていることから、哺乳類の確認種数は少なく、ヌートリア、ノイヌ、ノネコが確認された。

表 5.12.8 哺乳類確認種

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期				確認位置	
				春季	初夏	秋季	冬季	事業計画地	事業計画地外
1	ネズミ目	ヌートリア科	ヌートリア	19	40	50	24	75	58
2	ネコ目	イヌ科	ノイヌ (オオカミ)	2	1			1	2
3		ネコ科	ノネコ	5	3	7	2	14	3
計	2 目	3 科	3 種	3 種	3 種	2 種	2 種	3 種	3 種

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(河川環境データベース、令和 4 年 11 月) に準拠した。

2. 表中の数字は、確認例数(フィールドサイン法、トラップ法の合計値)を示す。

(ii) 鳥類の状況

鳥類の調査結果は表 5.12.9 に示すとおりであり、春の渡り期調査は 10 目 24 科 36 種、繁殖期前期調査は 10 目 20 科 26 種、繁殖期後期調査は 10 目 18 科 23 種、秋の渡り期前期調査は 10 目 24 科 40 種、秋の渡り期後期調査は 12 目 25 科 39 種、越冬期調査は 9 目 21 科 32 種、合計で 12 目 31 科 66 種の鳥類が確認された。事業計画地内では 47 種、事業計画地外では 57 種の鳥類が確認され、渡り区分別では留鳥が 28 種、夏鳥が 4 種、冬鳥が 24 種、旅鳥が 10 種確認された。

現地調査範囲は埋立地であり、草地、裸地、水域(水たまり)等の環境が大部分を占めており、樹木は低木類が点在するのみで樹林環境は存在しない。このため、森林性の鳥類であるキジバト、ヒヨドリ、ウグイス等の確認例数は少ないが、水辺や平地に生息する種が多く確認された。一方で、年間を通じてハシブトガラス、ムクドリ、スズメ、カワラバト(ドバト)等の市街地にも生息する種が多く確認された。また、確認例数は少ないものの、ハヤブサ、チョウゲンボウ等の小型の鳥類を捕食する猛禽類が確認された。

春の渡り期調査では 36 種が確認されており、草地や裸地、水域(水たまり)等で夏鳥のコアジサシが多く確認された。ハシブトガラス、ムクドリ等の市街地にも生息する種や、ケリ、ヒバリ、セッカ等の草地に生息する種が多く確認されており、コガモ、オオバン等の冬鳥も確認された。

繁殖期前期調査では 26 種が確認されており、春の渡り期調査に続きコアジサシが多く確認された。夏鳥として渡来するツバメやオオヨシキリが確認されており、草地ではヒバリやセッカ、ケリ等が、裸地ではコチドリ、シロチドリ等が、水域(水たまり)ではコアジサシ、カルガモ等が比較的多く確認された。

繁殖期後期調査では 23 種が確認されており、春の渡り期調査・繁殖期前期調査と同様、裸地や水域（水たまり）でコアジサシが多く確認された。

秋の渡り期前期調査では 40 種が確認されており、水域（水たまり）でアカアシシギ、ムナグロ等のシギ・チドリ類が多く確認され、その他にもウミネコ等のカモメ類、カイツブリ、カモ類等水辺に生息する種が確認された。

秋の渡り期後期調査では 39 種が確認されており、カルガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ウミアイサ等カモ類が 6 種確認され、他にもカイツブリ、オオバン、セグロカモメ、ミサゴ等の水辺に生息する種や、平地の低木環境でアリスイ等の冬鳥が確認された。ミサゴは、同時に 19 個体確認された。

越冬期調査では 32 種が確認されており、水域（水たまり）において多数のホシハジロが確認され、他にもツクシガモ、キンクロハジロ等のカモ類やハジロカイツブリ、ハマシギ等が水辺で確認された。また、タヒバリ、カワラヒワ等が草地で比較的多く確認された。

調査時には、繁殖兆候に着目して調査を実施した。ケリ、コチドリ、コアジサシ、ヒバリ、オオヨシキリ、セッカについては、春の渡り期から繁殖期後期にかけて、繁殖に関わる行動が確認された。確認された行動内容は、求愛給餌、排他行動、さえずり等であり、抱卵や雛、幼鳥等は確認されておらず、繁殖は確認されていない。ツクシガモ、マガモなどの冬鳥やムナグロ、セイタカシギ、ハマシギ等は、渡り途中の休息と思われる状況が確認された。また、オオバン、コチドリ、シロチドリ、チョウゲンボウ、ヒバリ等の多くの種で、採餌行動が確認された。

表 5.12.9 鳥類確認種

No.	目 名	科 名	種 名	渡り 区分	確認時期						確認位置	
					春の 渡り期	繁殖 期前期	繁殖 期後期	秋の 渡り 期前期	秋の 渡り 期後期	越冬 期	事業 計画地	事業 計画地外
1	カモ目	カモ科	ツクシガモ	冬鳥						6		6
2			ヒドリガモ	冬鳥					1	1	1	1
3			マガモ	冬鳥	4			1				5
4			カルガモ	留鳥	40	26	77	50	46	32	104	167
5			ハシビロガモ	冬鳥				7	8	1	11	5
6			コガモ	冬鳥	14							14
7			ホシハジロ	冬鳥		8			3	561		572
8			キンクロハジロ	冬鳥					1	35		36
9			スズガモ	冬鳥	2		4	4				10
10			ウミアイサ	冬鳥					4			4
11	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	留鳥	6	10	17	36	63	1	9	124
12			カンムリカイツブリ	冬鳥					1			1
13			ハジロカイツブリ	冬鳥					6	6		12
14	ハト目	ハト科	キジバト	留鳥	35	2	2	11		1	10	41
15	カツオドリ目	ウ科	カウウ	留鳥	36	13	20	29	7	10	36	79
16	ペリカン目	サギ科	アオサギ	留鳥	4	6	1	22	5		19	19
17			ダイサギ	留鳥				5	3		5	3
18	ツル目	クイナ科	バン	留鳥	2	2	1	1				6
19			オオバン	冬鳥	13			5	52	8		78
20	チドリ目	チドリ科	タゲリ	冬鳥					23		23	
21			ケリ	留鳥	12	16					21	7
22			ムナグロ	旅鳥	1			4				5
23			コチドリ	夏鳥	14	9	16	5			34	10
24			シロチドリ	留鳥	4	7	1	3		1	11	5
25		セイタカシギ科	セイタカシギ	旅鳥				2				2
26			アカアシシギ	旅鳥				2			2	
27			アオアシシギ	旅鳥				14	4		14	4
28			キアシシギ	旅鳥				2			2	
29			イソシギ	旅鳥					5			5
30			トウネン	旅鳥				31			31	
31		ツバメチドリ科	ハマシギ	旅鳥	3			20	56	143	79	143
32			ツバメチドリ	旅鳥			7				7	
33		カモメ科	ユリカモメ	冬鳥	3							3
34			ウミネコ	冬鳥	4		1	93	3			101
35			セグロカモメ	冬鳥	1			28	652	6	70	617
36			コアジサシ	夏鳥	756	319	104				459	720
37	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	留鳥	4	1	3	42	51	9	92	18
38		タカ科	トビ	留鳥	14	4		14	23	11	38	28
39	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	留鳥					1			1
40	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ	冬鳥					1		1	
41	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	留鳥	3	4	6	15	5	2	32	3
42			ハヤブサ	留鳥	2	1		1	3		5	2
43	スズメ目	モズ科	モズ	留鳥	2			2	16	1	16	5
44		カラス科	ハシボソガラス	留鳥		3	8	45	67	49	124	48
45			ハシブトガラス	留鳥	50	24	28	29	126	19	191	85
46		ツリスガラ科	ツリスガラ	冬鳥	1							1
47		ヒバリ科	ヒバリ	留鳥	66	75	104	34	251	311	613	228
48		ツバメ科	ツバメ	夏鳥	9	20	14	4			20	27
49		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	留鳥		1		7	2		8	2
50		ウグイス科	ウグイス	留鳥					1	2		3
51		ヨシキリ科	オオヨシキリ	夏鳥		15					4	11
52		セッカ科	セッカ	留鳥	35	54	76	9			69	105
53		ムクドリ科	ムクドリ	留鳥	188	145	137	217	165	104	672	284
54		ヒタキ科	ツグミ	冬鳥	9					8	4	13
55			ジョウビタキ	冬鳥					20	5	19	6
56			イソヒヨドリ	留鳥				8			7	1
57			エゾビタキ	留鳥				1			1	
58		スズメ科	スズメ	留鳥	46	85	111	53	50	18	167	199
59		セキレイ科	ハクセキレイ	留鳥	13	6	10	36	63	24	93	59
60			タヒバリ	冬鳥						48	20	28
61		アトリ科	カワラヒワ	留鳥	1			1	1	31	31	3
62		ホオジロ科	ホオジロ	留鳥					6	7	12	1
63			ホオアカ	冬鳥	1							1
64			アオジ	冬鳥	2					2	4	
65			オオジュリン	冬鳥					3		2	1
66	ハト目 (外来種)	ハト	カワラバト (ドバト)	留鳥		35	33	130	4	15	184	33
計	12目	31科	66種	-	36種	26種	23種	40種	39種	32種	47種	57種

- (注) 1. 分類及び配列は、「日本鳥類目録改訂第7版」(日本鳥学会、平成24年9月)に準拠した。
2. 渡り区分は、「日本鳥類目録改訂第7版」(日本鳥学会、平成24年9月)の記載を基本とし、現地調査による確認状況を踏まえ設定した。
3. 表中の数字は、確認例数(ラインセンサス法、ポイントセンサス法、直接観察法の合計値)を示す。

(iii) 爬虫類・両生類の状況

爬虫類・両生類の調査結果は表 5. 12. 10 に示すとおりであり、春季調査、初夏調査では 3 目 4 科 4 種、秋季調査では 1 目 1 科 1 種、合計で 3 目 4 科 4 種の両生類・爬虫類が確認された。事業計画地内では 3 種（両生類 2 種、爬虫類 1 種）、事業計画地外では 3 種（両生類 1 種、爬虫類 2 種）が確認された。

現地調査範囲は埋立地であり、草地や裸地等の環境が大部分を占めていることから、両生類・爬虫類の確認種は少なく、乾燥した環境にも耐えられるヌマガエルや草地に生息するニホンカナヘビが確認された。

表 5. 12. 10 両生類・爬虫類確認種

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期			確認位置	
				春季	初夏	秋季	事業計画地	事業計画地外
1	無尾目	アカガエル科	トノサマガエル	1	1		2	
2		ヌマガエル科	ヌマガエル	64	200+	13	100+	100+
3	カメ目	ヌマガメ科	ミシシippアカミミガメ	8	5			13
4	有鱗目	カナヘビ科	ニホンカナヘビ	3	2		3	2
計	3 目	4 科	4 種	4 種	4 種	1 種	3 種	3 種

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（河川環境データベース、令和 4 年 11 月）に準拠した。

2. 表中の数字は、確認例数を示す。なお、「200+」等の「+」は「それ以上の概数」であることを示す。

(iv) 昆虫類の状況

昆虫類の調査結果の概要は表 5. 12. 11 に示すとおりであり、13 目 117 科 301 種の昆虫類が確認された。事業計画地内では 258 種、事業計画地外では 141 種の昆虫類が確認された。

現地調査範囲は埋立地であり、草地、裸地、水域（水たまり）等の環境が大部分を占めており、樹木は低木類が点在するのみで樹林環境は存在しない。このため、全体的に森林性の種が少なく、草地性や河原等の開けた環境に生息する種が大半を占めている。草地性の種としては、バッタ目（オシロイバッタ等）やカメムシ目のヨコバイ科（*Maistas* 属等）、チョウ目のセセリチョウ科（イチモンジセセリ等）、シジミチョウ科（ヤマトシジミ本土亜種等）、シロチョウ科（モンシロチョウ等）、コウチュウ目のテントウムシ科（ナナホシテントウ等）、ハムシ科（アオバネサルハムシ等）、河原等に生息する種としてはコウチュウ目のコメツキムシ科（ハマベヒメサビキコリ等）、ハンミョウ科（コハンミョウ等）等が挙げられ、これらの種は春季～秋季の調査期間を通じて比較的多く確認された。また、水域（水たまり）などの水辺環境では、トンボ目のイトトンボ科（アオモンイトトンボ等）やトンボ科（シオカラトンボ等）、カメムシ目のコマツモムシ、コウチュウ目のゲンゴロウ科（チャイロチビゲンゴロウ等）やガムシ科（キイロヒラタガムシ等）等、止水性の種が多く確認されたが、流水環境はないことから流水域に生息する種は確認されていない。

表 5. 12. 11 昆虫類確認種の概要

目 名	事業計画地		事業計画地外		合 計		主な現地調査確認種
	科数	種数	科数	種数	科数	種数	
クモ目	8	22	6	14	8	25	ノコギリヒザグモ、ヒカリアシナガグモ、アシナガグモ、ドヨウオニグモ、オニグモ、ウズキコモリグモ、ヤハズハエトリ等
トビムシ目	1	1	—	—	1	1	ツチトビムシ科
トンボ目	3	8	3	10	3	10	アオモンイトトンボ、セスジイトトンボ、ムスジイトトンボ、ギンヤンマ、ショウジョウトンボ、ハラビロトンボ、シオカラトンボ、ウスバキトンボ、チョウトンボ、ナツアカネ
カマキリ目	1	2	1	1	1	2	チョウセンカマキリ、オオカマキリ
ハサミムシ目	2	2	—	—	2	2	コバネハサミムシ、オオハサミムシ
バッタ目	10	18	8	18	10	22	ツユムシ、ホシササキリ、エンマコオロギ、ショウリョウバッタ、マダラバッタ、トノサマバッタ、ツチイナゴ、オンブバッタ、ハネナガヒシバッタ等
カメムシ目	18	40	13	22	20	48	ヒシウンカ、ハマベアワフキ、 <i>Maestas</i> 属、クロミヤクイチモンジョコバイ、アワダチソウゲンバイ、ナカグロカスミカメ、ミナミマキバサシガメ、ヒゲナガカメムシ、ヒメツチカメムシ、アサヒナコミズムシ、コマツモムシ等
アミメカゲロウ目	1	1	1	2	1	2	クモンクサカゲロウ、スズキクサカゲロウ
トビケラ目	2	2	—	—	2	2	ムネカクトビケラ、ヒメトビケラ科
チョウ目	14	35	11	24	15	44	イチモンジセセリ、ツバメシジミ、ヤマトシジミ本土亜種、ヒメアカタテハ、アオスジアゲハ、モンキチョウ、モンシロチョウ、ウスアトキハマキ、コブノメイガ、アワノメイガ、シバツトガ、カバイロトガリメイガ等
ハエ目	18	26	12	19	21	34	ユスリカ科、ホソヒラタアブ、ミズアブ、キンバエ、イエバエ科、コニクバエ等
コウチュウ目	21	77	6	15	21	80	ミイデラゴミムシ、セアカヒラタゴミムシ、オオゴミムシ、ミドリマメゴモクムシ、コハンミョウ、チャイロチビゲンゴロウ、チビゲンゴロウ、キイロヒラタガムシ、アオドウガネ、ハマベヒメサビキコリ、ナナホシテントウ、アオバネサルハムシ等
ハチ目	7	24	9	16	12	29	クロヤマアリ、クロヒメアリ、トビイロシワアリ、フタモンアシナガバチ本土亜種等
合計	106 科 258 種		70 科 141 種		117 科 301 種		—

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(河川環境データベース、令和4年11月)に準拠した。

2. 主な現地調査確認種は、個体数の多いものや現地調査範囲の代表的な環境に生息する種を記載した。

3. 「—」は、確認されなかったことを示す。

(v) 魚 類

魚類の調査結果は表 5. 12. 12 に示すとおりであり、春季調査、夏季調査ともに 1 目 1 科 2 種の魚類が確認された。現地調査地点は事業計画地外のみである。

春季調査、夏季調査ともにチチブ、ゴクラクハゼの 2 種が確認された。

現地調査地点の池は水が流入又は流出する水路等がなく、海域等との連続性はないが、汽水域の種が確認された。

表 5. 12. 12 魚類確認種

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期		確認位置
				春季	夏季	事業計画地外
1	スズキ目	ハゼ科	チチブ	16	10	26
2			ゴクラクハゼ	9	18	27
計	1 目	1 科	2 種	2 種	2 種	2 種

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(河川環境データベース、令和 4 年 11 月) に準拠した。

2. 表中の数字は、確認例数を示す。

(vi) 底生動物

底生動物の調査結果は表 5. 12. 13 に示すとおりであり、春季調査は 6 目 9 科 17 種、夏季調査は 8 目 13 科 21 種、合計 10 目 16 科 30 種の底生動物が確認された。現地調査地点は、事業計画地外のみである。

現地調査地点の池は水が流入又は流出する水路等がなく、海域等との連続性はない。このような環境から、確認された底生動物は飛翔能力のある昆虫類が大部分を占めており、昆虫類以外の確認種はサカマキガイ、ウチワミミズ属等、限定的である。汽水域に特徴的な種としてはユビナガスジエビのみである。現地調査地点の池の水生植物が繁茂している場所では、カメムシ目のミズムシ科、コウチュウ目のゲンゴロウ科、ガムシ科等の種が確認された。トンボ目ではイトトンボ科、トンボ科、ハエ目のユスリカ科等が比較的種類数が多く、いずれも止水域に生息する種が確認された。

春季調査では 17 種が確認されており、汽水域に生息するユビナガスジエビや止水性トンボの一種であるコフキトンボ、シオカラトンボ、アサヒナコミズムシ、ウチワミミズ属等が確認された。

夏季調査では 21 種が確認されており、水生植物が生育している場所でチビミズムシ属、ゴマフガムシ属等が確認された。

表 5. 12. 13 底生動物確認種

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期		確認位置 事業 計画 地外
				春季	夏季	
1	基眼目	サカマキガイ科	サカマキガイ		1	1
2	イトミミズ目	ミズミミズ科	ウチワミミズ属	6		6
3	吻蛭目	ヒラタビル科	ヌマビル		1	1
4	エビ目	テナガエビ科	ユビナガスジエビ	2		2
5	カゲロウ目	コカゲロウ科	フタバカゲロウ属		4	4
6	トンボ目	イトトンボ科	アオモンイトトンボ	2		2
-			アオモンイトトンボ属	1	10	11
7			クロイトトンボ		6	6
-			クロイトトンボ属	3	10	13
8		ヤンマ科	ギンヤンマ		1	1
9		トンボ科	ショウジョウトンボ	3	2	5
10			コフキトンボ	1	3	4
11			ハラビロトンボ	1		1
12			シオカラトンボ	4		4
-			トンボ科		1	1
13	カメムシ目	アメンボ科	アメンボ		1	1
14			ヒメアメンボ	2		2
-			アメンボ科		2	2
15		カタビロアメンボ科	マダラケシカタビロアメンボ		1	1
16		ミズムシ科 (昆)	チビミズムシ属		1	1
17			アサヒナコミズムシ	6		6
-			コミズムシ属	4		4
18		マツモムシ科	コマツモムシ		2	2
19	ハエ目	ユスリカ科	ダングラヒメユスリカ属		4	4
20			ユスリカ属	2	27	29
21			ツヤユスリカ属	1		1
22			ホソミユスリカ属		1	1
23			ミナミユスリカ		6	6
24			ニセヒゲユスリカ属		6	6
25			ハモンユスリカ属	33	5	38
26			ヒメエリユスリカ属	1		1
27			ヒゲユスリカ属	4	25	29
-			ユスリカ亜科	5	7	12
28	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ケシゲンゴロウ	1		1
29		ガムシ科	オオトゲバゴマフガムシ	1		1
-			ゴマフガムシ属		1	1
30	ハネコケムシ目	ヒメテンコケムシ科	ヒメテンコケムシ		1	1
計	10 目	16 科	30 種	17 種	21 種	30 種

(注) 1. 分類及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(河川環境データベース、令和4年11月)に準拠した。

2. 種数の計数方法は、「平成28年度版河川水辺の国勢調査基本調査マニュアル(底生動物調査編)」に準拠した。同じ科、属に属する種が出現している場合は1種として計上しない。

3. 表中の数字は、確認例数(任意採集法とコドラート法の確認例数の合計値)を示す。

(vii) 重要な種及びその生息地の分布、特徴

① 重要な種

表 5.12.5 に示す重要な種の選定基準により、表 5.12.14～5.12.17 に示す 40 種の重要な種（鳥類 31 種、両生類 1 種、昆虫類 7 種、底生動物 2 種（1 種は昆虫類の確認種と重複））が抽出された。

鳥類の重要な種は、ツクシガモ、ツバメチドリ、コアジサシ、ヒバリ、セッカ等 31 種が確認された。多くの種で採餌行動が確認されており、このうち、ケリ、コチドリ、コアジサシ、ヒバリ、オオヨシキリ、セッカの 6 種は、繁殖に関わる行動（求愛給餌、排他行動、さえずり等）が確認されたが、営巣や繁殖成功（巣立ち後の幼鳥等）は確認されていない。なお、シロチドリは繁殖期に繁殖に適した裸地で複数例確認されたものの、繁殖に関わる行動は確認されていない。オオバン、ハマシギ等 20 種は現地調査範囲に飛来する旅鳥・冬鳥であり、渡り途中の休息と思われる状況が確認されたことから、休息地や餌場、渡りの中継地、越冬地として利用していると考えられる。ミサゴ、カワセミ、チョウゲンボウ、ハヤブサについては、繁殖に適した環境は現地調査範囲内では確認されていない。

両生類の重要な種は、トノサマガエル 1 種が確認された。確認された個体はいずれも成体で 2 例のみであること、トノサマガエルに適している生息環境は現地調査範囲内にほとんどないことから、現地調査範囲内で繁殖している可能性はほとんどないものと考えられる。

昆虫類の重要な種は、セスジイトトンボ、ナツアカネ、クロケブカゴミムシ、ジュウクホシテントウ等 7 種が確認された。

底生動物の重要な種は、コフキトンボとケシゲンゴロウの 2 種が確認された。ケシゲンゴロウは、昆虫類調査と底生動物調査の両方で確認された。

表 5. 12. 14 現地調査で確認された重要な種（鳥類）

No.	目 名	科 名	種 名	渡り区分	確認時期						確認位置		重要な種の選定基準				
					春の渡り期	繁殖期前期	繁殖期後期	秋の渡り期前期	秋の渡り期後期	越冬期	事業計画地	事業計画地外	①	②	③	④	⑤
1	カモ目	カモ科	ツクシガモ	冬鳥						○		○			VU		2
2			マガモ	冬鳥	○			○				○					3
3			ウミアイサ	冬鳥					○			○				NT	3
4	カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ	冬鳥					○			○					3
5	ツル目	クイナ科	オオバン	冬鳥	○			○	○	○		○					3
6	チドリ目	チドリ科	タゲリ	冬鳥					○			○				NT	3
7			ケリ	留鳥	○	○					○	○			DD	NT	
8			ムナグロ	旅鳥	○			○			○					VU	3
9			コチドリ	夏鳥	○	○	○	○			○	○				NT	3
10			シロチドリ	留鳥	○	○	○	○		○	○	○			VU	VU	3
11		セイタカシギ科 シギ科	セイタカシギ	旅鳥				○				○			VU		
12			アカアシシギ	旅鳥				○			○				VU	NT	2
13			アオアシシギ	旅鳥				○	○		○	○				VU	3
14			キアシシギ	旅鳥				○			○					NT	3
15			イソシギ	旅鳥					○			○				NT	2
16			トウネン	旅鳥				○			○					NT	3
17			ハマシギ	旅鳥	○			○	○	○	○	○			NT		3
18		ツバメチドリ科	ツバメチドリ	旅鳥			○					○			VU	CR+EN	2
19		カモメ科	コアシサシ	夏鳥	○	○	○				○	○			VU	CR+EN	2
20	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○			NT		2
21	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	留鳥					○			○					3
22	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ	冬鳥					○		○						3
23	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○					3
24	スズメ目	ヒバリ科	ハヤブサ	留鳥	○	○		○	○		○	○		国内	VU		3
25			ヒバリ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○				NT	
26		ヨシキリ科	オオヨシキリ	夏鳥		○					○	○				NT	3
27		セッカ科	セッカ	留鳥	○	○	○	○			○	○				NT	
28		ヒタキ科	エゾビタキ	旅鳥				○			○						3
29		ホオジロ科	ホオアカ	冬鳥	○							○				NT	3
30			アオジ	冬鳥	○					○	○						3
31			オオジュリン	冬鳥					○		○	○				NT	
計	9目	17科	31種	-	15種	10種	8種	17種	14種	8種	22種	22種	0種	1種	10種	18種	26種

（注） 1. 分類及び配列は「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥学会、平成24年9月）に準拠した。

2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。

3. 渡り区分は、「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥学会、平成24年9月）の記載を基本とし、現地調査による確認状況を踏まえ設定した。

表 5. 12. 15 現地調査で確認された重要な種（両生類・爬虫類）

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期			確認位置		重要な種の選定基準			
				春季	初夏	秋季	事業計画地	事業計画地外	①	②	③	④
1	無尾目	アカガエル科	トノサマガエル	1	1		2				NT	NT
計	1 目	1 科	1 種	1 種	1 種	0 種	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種	1 種

(注) 1. 分類及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（河川環境データベース、令和4年11月）に準拠した。
2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。

表 5. 12. 16 現地調査で確認された重要な種（昆虫類）

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期			確認位置		重要な種の選定基準			
				春季	夏季	秋季	事業計画地	周辺	①	②	③	④
1	トンボ目	イトトンボ科	セスジイトトンボ		60+		30+	30+				NT
2		トンボ科	ナツアカネ			10+		10+				NT
3	コウチュウ目	オサムシ科	クロケブカゴミムシ		1		1					NT
4		ゲンゴロウ科	ケシゲンゴロウ	1	1		2				NT	NT
5		ガムシ科	コガムシ		5		5				DD	NT
6		デントウムシ科	ジュウクホシテントウ	1		1		2				NT
7			ジュウサンホシテントウ	1			1					NT
計	2 目	6 科	7 種	3 種	4 種	2 種	5 種	3 種	0 種	0 種	2 種	7 種

(注) 1. 分類及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（河川環境データベース、令和4年11月）に準拠した。
2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。
3. 「60+」等の「+」は「それ以上の概数」であることを示す。

表 5. 12. 17 現地調査で確認された重要な種（底生動物）

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期		確認位置	重要な種の選定基準			
				春季	夏季		①	②	③	④
1	トンボ目	トンボ科	コフキトンボ	1	3	4				NT
2	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ケシゲンゴロウ	1		1			NT	NT
計	2 目	2 科	2 種	2 種	2 種	2 種	0 種	0 種	1 種	2 種

(注) 1. 分類及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（河川環境データベース、令和4年11月）に準拠した。
2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 5 に示すとおりである。

表 5. 12. 18(1) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
鳥 類	ツクシガモ		・越冬期調査で、事業計画地外の池において6例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	マガモ	写真なし	・春の渡り期調査で、事業計画地外の池及び構造物等において4例確認された。採餌行動等が確認され、渡り途中の休息と思われる。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の池において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
	ウミアイサ		・秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の池において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
	カンムリカイツブリ		・秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の池において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
	オオバン		・春の渡り期調査で、事業計画地外の池及び海域において13例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の池において5例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の池において52例確認された。主に休息、採餌行動が確認された。 ・越冬期調査で、事業計画地外の水域（池、水たまり）及び海域において8例確認された。主に休息、採餌行動が確認された。

表 5. 12. 18(2) 重要な種の確認状況

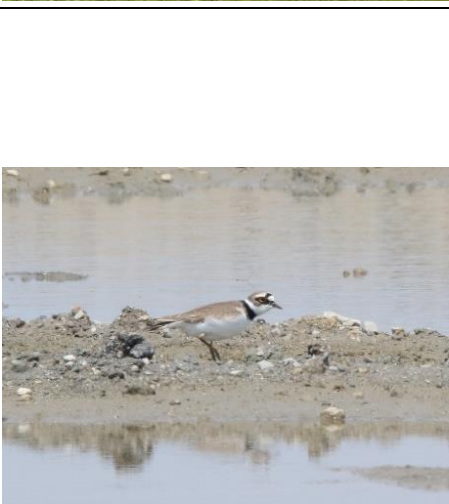
確認種		写 真	確認状況
鳥 類	タゲリ		・秋の渡り期後期調査で、事業計画地の上空において 23 例確認された。地上へは降りず、渡り途中と思われる。
	ケリ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地において 12 例確認された。主に採餌行動や追跡等の排他行動が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地の草地において 16 例確認された。主に採餌行動、追跡等の排他行動が確認された。
	ムナグロ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地において 1 例確認された。渡り途中の休息と思われる。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において 4 例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	コチドリ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地並びに事業計画地外の裸地及び池において 14 例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（水たまり）において 9 例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）、地鳴きが確認された。 ・繁殖期後期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）において 16 例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）、地鳴きが確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地及び水域（水たまり）において 5 例確認された。主に採餌行動が確認された。

表 5. 12. 18(3) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
鳥 類	シロチドリ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地及び事業計画地外の水域（水たまり）において4例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地の裸地において7例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・繁殖期後期調査で、事業計画地外の裸地において1例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において3例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・越冬期調査で、事業計画地外の水域（水たまり）において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
	セイタカシギ		・秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の池において2例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	アカアシシギ		・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において2例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	アオアシシギ		・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において14例確認された。渡り途中の休息と思われる。 ・秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の水域（水たまり）及び裸地において3例確認された。渡り途中の休息と思われる。

表 5. 12. 18(4) 重要な種の確認状況

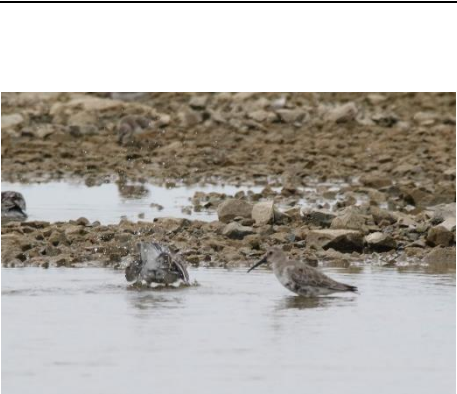
確認種		写 真	確認状況
鳥 類	キアシシギ		・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において 2 例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	イソシギ		・秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の水域（池、水たまり）において 5 例確認された。主に採餌行動が確認された。
	トウネン		・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において 31 例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	ハマシギ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地において 3 例確認された。渡り途中の休息と思われる。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において 20 例確認された。渡り途中の休息と思われる。 ・秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の水域（水たまり）において 56 例確認された。渡り途中の休息と思われる。 ・越冬期調査で、事業計画地外の池及び草地において 143 例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	ツバメチドリ		・繁殖期後期調査で、事業計画地の裸地において 7 例確認された。渡り途中の休息と思われる。

表 5. 12. 18(5) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
鳥 類	コアジサシ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地、水域（池、水たまり、海域）及び広い範囲の上空において 756 例確認された。主に採餌行動や求愛給餌、堤防での休息が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（池、水たまり、海域）において 319 例確認された。主に採餌行動や求愛給餌、堤防での休息が確認された。 ・繁殖期後期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地、構造物等及び水域（水たまり）において 104 例確認された。主に採餌行動や地上での休息、水たまりでの水浴びが確認された。
	ミサゴ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地並びに事業計画地外の池及び上空において 4 例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において 1 例確認された。水辺での休息等が確認された。 ・繁殖期後期調査で、事業計画地の裸地及び水域（水たまり）において 3 例確認された。地上や水辺での休息が確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地、裸地、構造物等及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（水たまり）において 42 例確認された。主に地上での休息や水たまりでの水浴び、地鳴きが確認された。 ・秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地、裸地、構造物等及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（水たまり、海域）において 51 例確認された。主に地上での休息や水たまりでの水浴びが確認された。 ・越冬期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地、裸地及び海域において 9 例確認された。主に採餌行動や地上での休息が確認された。

表 5. 12. 18(6) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
鳥 類	カワセミ		・秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の草地において1例確認された。水辺にある草地での休息が確認された。
	アリスイ		・秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地において1例確認された。枝先での休息が確認された。
	チョウゲンボウ		・春の渡り期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地において3例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において4例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・繁殖期後期調査で、事業計画地の草地並びに事業計画地外の裸地及び構造物等において6例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地及び構造物等において15例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地及び構造物等において5例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・越冬期調査で、事業計画地の草地及び事業計画地外の裸地において2例確認された。主に採餌行動が確認された。

表 5. 12. 18(7) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
鳥 類	ハヤブサ		・春の渡り期調査で、事業計画地及びその周辺の上空において 2 例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地の裸地において 1 例確認された。主に採餌行動が確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の構造物等において 1 例確認された。主に休息が確認された。 ・秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地において 3 例確認された。主に採餌行動が確認された。
	ヒバリ		・春の渡り期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において 66 例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地、裸地及び構造物等において 75 例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。 ・繁殖期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において 104 例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において 34 例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。 ・秋の渡り期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において 251 例確認された。主に採餌行動や地上での休息、求愛行動（さえずり）、地鳴きが確認された。 ・越冬期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において 311 例確認された。主に採餌行動や休息が確認された。
	オオヨシキリ		・繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において 15 例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。

表 5. 12. 18(8) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
鳥 類	セッカ		・春の渡り期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において 35 例確認された。主に求愛行動（さえずり）や採餌行動、地鳴きが確認された。 ・繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において 54 例確認された。主に求愛行動（さえずり）や採餌行動が確認された。 ・繁殖期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において 76 例確認された。主に求愛行動（さえずり）や採餌行動、地鳴きが確認された。 ・秋の渡り期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において 9 例確認された。主に採餌行動や地鳴きが確認された。
	エゾビタキ		・秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地において 1 例確認された。主に採餌行動が確認された。
	ホオアカ	写真なし	・春の渡り期調査で、事業計画地外の草地において 1 例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	アオジ	写真なし	・春の渡り期調査で、事業計画地の草地において 2 例確認された。渡り途中の休息と思われる。 ・越冬期調査で、事業計画地の草地において 2 例確認された。渡り途中の休息と思われる。
	オオジュリン		・秋の渡り期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において 3 例確認された。主に採餌行動が確認された。
両生類	トノサマガエル	写真なし	・春季調査で、事業計画地の草地において 1 例確認された。 ・初夏調査で、事業計画地の草地において 1 例確認された。

表 5. 12. 18(9) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
昆虫類	セスジイト トンボ	写真なし	・夏季調査で、事業計画地及びその周 辺の草地において約 10 個体ずつが 確認された。
	ナツアカネ	写真なし	・秋季調査で、事業計画地外の水域 (水たまり)において 4 個体を確認 された。
	クロケブカ ゴミムシ		・夏季調査で、事業計画地におけるラ イトトラップ法により 1 個体確認 された。
	ケシゲンゴ ロウ		・春季調査で、事業計画地におけるラ イトトラップ法により 1 個体確認 された。 ・夏季調査で、事業計画地におけるラ イトトラップ法により 1 個体確認 された。
	コガムシ		・夏季調査で、事業計画地におけるラ イトトラップ法により 5 個体確認 された。
	ジュウクホ シテントウ		・春季調査で、事業計画地外の草地に おいて任意採取法により 1 個体確 認された。 ・秋季調査で、事業計画地外の草地に おいて任意採取法により 1 個体確 認された。
	ジュウサン ホシテントウ		・春季調査で、事業計画地の草地にお いて任意採取法により 1 個体確認 された。

表 5. 12. 18(10) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
底生動物	コフキトンボ		・春季調査で、事業計画地外の池において1個体確認された。 ・夏季調査で、事業計画地外の池において3個体確認された。
	ケシゲンゴロウ		・春季調査で、事業計画地外の池において1個体確認された。

② 注目すべき生息地

注目すべき生息地は、確認されなかった。

(2) 施設の存在、建設工事に伴う影響の予測及び評価

施設の存在に伴う影響の予測及び評価は高層建築物の存在を対象に、建設工事に伴う影響の予測及び評価は建設機械の稼働、土地の改変を対象に実施した。

(a) 予測概要

高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴う陸域動物の予測内容は、表 5. 12. 19 に示すとおりである。

表 5. 12. 19 予測の内容

予測項目		予測方法	予測範囲	予測時期
高層建築物の存在、建設機械の稼働、土地の改変	陸域動物の生息環境及び重要な種への影響	事業計画の内容、現地調査結果等をもとに推定	事業計画地及びその周辺	施設の存在時及び工事中

(b) 予測方法

高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴う陸域動物の生息環境への影響の程度について、陸域動物の現地調査結果、環境の保全及び創造のための措置を踏まえ、工事計画、建築計画等から陸域動物の生息環境及び重要な種への影響を定性的に予測した。

(c) 予測結果

(ア) 陸域動物の生息環境への影響の予測結果

事業計画地及びその周辺は、全体的に裸地が多く、乾燥した立地となっている。現地調査時には、窪地状になっている箇所では水がたまり湿性の環境も確認されたが、まとまった樹林は見られず、木本類は事業計画地の周辺部に若干残存している程度である。確認された陸域動物は、そのほとんどが草地や市街地近郊の緑地等においてよく見られる種であるが、鳥類 31 種、両生類 1 種、昆虫類 7 種、底生動物 2 種（1 種は昆虫類の確認種と重複）の重要な種 40 種が確認された。

確認された重要な種のうち鳥類 6 種（ケリ、コチドリ、コアジサシ、ヒバリ、オオヨシキリ、セッカ）は、草地や裸地で繁殖に関わる行動が確認されたものの、営巣や繁殖成功は確認されていない。また、両生類、昆虫類（底生動物）の重要な種は、特殊な環境に依存する種は確認されていない。重要な種が確認された草地、裸地、水域等の環境はいずれも事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾沿岸にも存在しており、施設の存在時及び工事中においてもこれらの周辺環境を利用可能であると考えられる。

また、以下の環境の保全及び創造のための措置を実施することにより、陸域動物への影響は可能な限り低減されるものと予測される。

- ・高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。
- ・工事計画の策定にあたっては、アースドリル掘削工法等周辺環境への影響の小さい工法の採用、散水の実施等により、騒音・振動、粉じんによる環境影響の回避又は低減に努める。
- ・建設工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発

生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。

- ・公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、水質汚濁防止法、大阪府生活環境の保全等に関する条例の排水基準を満足させるよう、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。また、工事中のし尿については、水質汚濁防止法、大阪府生活環境の保全等に関する条例の排水基準を満足させるよう、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りにより、周辺のし尿処理場へ搬出する。
- ・土地の改変にあたっては、専門家から得た助言を踏まえ、供用時には在来種を基本として郷土種も活用するなど地域の生態系へ配慮することで、多種多様な緑地の整備による生態系ネットワークの維持・形成をめざす。
- ・北側に配置する「ウォーターフロント」ゾーンでは、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所に多様な草丈の草地を確保することで、草地に生息する鳥類などの動物に配慮した環境の創出に努める。

以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴う陸域動物の生息環境への影響は小さいものと考えられる。

なお、大阪市等の関係機関と協議調整を行った結果、裸地を利用する鳥類が利用できる区域となるよう夢洲1区内水面の西側の区域において、2023～2025年度は草刈りや砂利敷き等の対策が実施される予定であり、2025年度以降の裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保について、夢洲1区の埋立事業が完了した場所を基本に、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしており、また、大阪市は、水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、検討するとしている。

さらに、大阪湾周辺では夢洲以外にも裸地や水辺の環境が存在することから、これらの環境を利用することも可能と考えられる。

(イ) 重要な種への影響の予測結果

重要な種への影響の予測結果は、表 5. 12. 20 に示すとおりである。

表 5. 12. 20(1) 重要な種の予測結果

予測対象種	ツクシガモ
生態の概要	【分布】日本には冬鳥として九州に渡来、日本各地に少数が現れる。 【生態】泥深い干潟の水路や水を張った水田で見られる。繁殖地は温暖な半乾燥地で、塩水湖、浅い沿岸、河口、内陸の湖沼などの浅く水につかる砂泥地である。軟体動物、昆虫、甲殻類などを食べる。繁殖期は4～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は樹木の洞穴、岩の割れ目、哺乳類の巣穴など、いろいろな穴の中につくる。
確認状況	越冬期調査で、事業計画地外の池において6例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地外の池を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の池は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うツクシガモへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	マガモ
生態の概要	【分布】日本では大部分が冬鳥として全土で越冬するが、北海道、本州各地、対馬などに少数の繁殖記録がある。 【生態】冬は河川、湖沼、ダム湖、沿岸の海上、入り江など、いろいろな水系、特に内陸の水系で見られる。繁殖地では、淡水系で水際に草むらの藪の多いところにすむ。雑食性だが、水草の葉・茎・種子などの植物食が主である。繁殖期は4～8月、一夫一妻で繁殖するが、つがいの関係は抱卵期に解消する。巣は水辺の草むらや藪の下の浅い窪みに草の葉などを敷いた皿型で、雌のみでつくる。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地外の池及び構造物等において4例確認された。採餌行動等が確認され、渡り途中の休息と思われる。秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の池において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の池や構造物等を一時的な休息の場や採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の池や構造物等は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うマガモへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」(中村登流、中村雅彦著、平成7年3月)である。

表 5. 12. 20(2) 重要な種の予測結果

予測対象種	ウミアイサ
生態の概要	【分布】日本には冬鳥としてほぼ全土に現れ、比較的好く見かけるカモであるが、南西諸島には少ない。 【生態】海岸の沿岸に現れ、比較的浅い岩礁に多いことが多いが、砂浜に来ることもある。河口部や干潟の水路、潟湖などに入ることもあるが、淡水湖に来ることはまれである。沿岸の岩礁地などで潜水して採食する。主として魚食で、体長8～10cmぐらいの獲物をくわえとり、水面に浮かんで呑み込む。繁殖期は5～7月、短期的な一夫一妻で繁殖するものが多いが、一夫多妻や一妻多夫の記録がある。巣は地上につくり、樹木や草むらの間、崖の割れ目の中や洞窟の中などにある。
確認状況	秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の池において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の池を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の池は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うウミアイサへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	カンムリカイツブリ
生態の概要	【分布】日本には冬鳥として渡来し、青森県下では繁殖が記録された。淀川でも繁殖が確認されている。 【生態】海岸や海岸近くの淡水湖沼や大きな川に多く、まれに内陸の湖沼や大きな川にまで入ってくる。冬は内湾の海上にも現れる。潜水を繰り返し、魚類を好んで食べるほか、水生の甲殻類、昆虫、イモリやオタマジャクシなどの両生類も食べる。繁殖期は3～8月、年に1～2回、一夫一妻で繁殖する水草が密生した水辺の浅瀬に雌雄共同で水草を積み上げて皿型の浮き巣をつくる。
確認状況	秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の池において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の池を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の池は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うカンムリカイツブリへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」(中村登流、中村雅彦著、平成7年3月)である。

表 5. 12. 20(3) 重要な種の予測結果

予測対象種	オオバン
生態の概要	【分布】日本では主に本州中部以北、北海道で繁殖するが、各地でも少数ながら繁殖することが記録されている。東北地方北部のものは、それより南に渡って越冬する。 【生態】湖沼、河川、水田、ハス田などのヨシやガマが生育する湿地に生息する。水面を泳いだり潜水して水草の葉・茎・種子を食べるほか、水生昆虫、下位、甲殻類も採食する。繁殖期は4～8月、年に1～2回、一夫一妻で繁殖する。ヨシ原や草むらの中の水面に、雌雄行動で枯れ草を積み重ねて皿型の巣をつくる。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地外の池及び海域において13例確認された。主に採餌行動が確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の池において5例確認された。主に採餌行動が確認された。秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の池において52例確認された。主に休息、採餌行動が確認された。越冬期調査で、事業計画地外の水域（池、水たまり）及び海域において8例確認された。主に休息、採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の水域（池、水たまり）及び海域を休息の場や採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の池は本事業により改変されず、海域においても一部の沿岸部を除いて改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うオオバンへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	タゲリ
生態の概要	【分布】日本には冬鳥として本州、四国、九州などの各地に渡来し、10月から翌年の4月までよく見られ、比較的冬に多い。北海道では旅鳥である。 【生態】水田、湿田、干潟、河原や湖沼の水辺、湿っぽい畑地、水たまりのある荒れ地などで見られる。開けて見通しの良い平坦地を好む。水を含んだ泥地を片足で叩いて、虫を追い出してとったりする。地上の昆虫やその幼虫など、無脊椎動物をついばむ。繁殖期は3～6月、一夫一妻で繁殖する。単独で繁殖するつがいもあるが、ルーズなコロニー状に集まって繁殖するつがいもある。巣は地上の草むらの中に窪みをつくり、草の葉・茎を集めて、皿型にする。たいていの巣の周辺に草むらを踏みつぶしただけのいくつかの擬巣がある。
確認状況	秋の渡り期後期調査で、事業計画地の上空において23例確認された。地上へは降りず、渡り途中と思われる。
予測結果	本種は事業計画地の上空を通過しているのみであると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うタゲリへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5. 12. 20(4) 重要な種の予測結果

予測対象種	ケリ
生態の概要	【分布】日本では本州の中部以北で夏鳥として繁殖し、兵庫県あたりが南限である。冬は一部が越冬し、本州中部以南に比較的多い。 【生態】水田、河原、荒れ地、芝原、牧草地、灌木が散在する草原など、平坦で開けた場所にすむ。地上を歩いたり走ったりして採食する。昆虫の成虫・幼虫、イネ科やタデ科などの草の種子などをついばむ。繁殖期は3～6月、一夫一妻で繁殖する。巣は地上の砂地に窪みを掘り、枯れ草、藓類、地衣類、木片などを敷く。草むらの中につくる場合は、周りの草を踏み倒して窪みに替える。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地において12例確認された。主に採餌行動や追跡等の排他行動が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地の草地において16例確認された。主に採餌行動、追跡等の排他行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地、裸地及びその周辺の草地を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。繁殖期間中に工事が予定されている区域内では繁殖期前から営巣防止対策を実施する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。 草地や裸地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うケリへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	ムナグロ
生態の概要	【分布】日本では渡りの途上の8～10月と4～6月に立ち寄る旅鳥であるが、一部は本州中部以南で越冬する。沖縄県では多く見られる。 【生態】渡り期には、水を張った水田、掘り起こした水田、河原、砂浜、牧草地などで見られ、冬は乾田、芝生、干拓地、荒れ地、干潟、サトウキビを刈り取った跡地などにいる。昆虫、甲殻類、貝類、ミズやゴカイ類などの動物食だが、草の種子も食べる。繁殖期は6～7月ごろ、一夫一妻で繁殖する。巣は地上に窪みをつくり、草や葉を敷く。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地において1例確認された。渡り途中の休息と思われる。秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において4例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地の草地及び水域を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 草地や水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うムナグロへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5. 12. 20(5) 重要な種の予測結果

予測対象種	コチドリ
生態の概要	【分布】日本では北海道、本州、四国、九州などに夏鳥として渡来して繁殖する。渡り期には各地に現れ、九州以南で少数が越冬する。 【生態】河川敷の中州、水辺、河口の三角州や干潟、海岸の砂浜、植生が疎らで裸出土の多い荒地などで見られるが、道路工事やダム、その他大規模に整地している工事現場などで、短期間放置されている荒地地状のところなどでも見られる。砂泥地の表面から昆虫の成虫・幼虫を加えとる。繁殖期は4～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は砂地に浅い窪みを掘り、内装に小石や貝殻の破片、あるいは植物片などを敷く。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地並びに事業計画地外の裸地及び池において14例確認された。主に採餌行動が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（水たまり）において9例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）、地鳴きが確認された。繁殖期後期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）において16例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）、地鳴きが確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地及び水域（水たまり）において5例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地、裸地、水域を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。繁殖期間中に工事が予定されている区域内では繁殖期前から営巣防止対策を実施する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 草地や裸地、水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保や水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うコチドリへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5.12.20(6) 重要な種の予測結果

予測対象種	シロチドリ
生態の概要	【分布】日本には夏鳥として本州以南に渡来して繁殖する。本州西南部以南で少数が越冬する。 【生態】海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州などで繁殖し、渡り期や越冬地では海岸や河口の干潟、潟湖、湖沼、溜池、河川などの砂泥地で見られる。鞘翅類や半翅類などの昆虫、クモ類、ハマトビムシなどの甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類などを食べ、引く波を追いかけて、砂に隠れるヨコエビ類を捕える。繁殖期は3～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は砂地の漂流物の間や疎らな草の間などの浅い窪みに、木片、小石、貝殻片などを敷いてつくる。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地及び事業計画地外の水域（水たまり）において4例確認された。主に採餌行動が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地の裸地において7例確認された。主に採餌行動が確認された。繁殖期後期調査で、事業計画地外の水域において1例確認された。主に採餌行動が確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において3例確認された。主に採餌行動が確認された。越冬期調査で、事業計画地外の水域（水たまり）において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地、裸地、水域及び事業計画地外の水域、水域を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生を抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。繁殖期間中に工事が予定されている区域内では繁殖期前から営巣防止対策を実施する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 草地や裸地、水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保や水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うシロチドリへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	セイタカシギ
生態の概要	【分布】日本ではほぼ全土の各地にまれに見られ、個体数は少ないが比較的頻繁に見られる。 【生態】熱帯から温帯にかけて、降雨林から砂漠地帯に至るまで幅広く生息する。浅い淡水・塩水の湖沼、河川とその縁の湿地で繁殖する。静かな水の中に入って採食する。双翅類などの昆虫の幼虫や小さい甲殻類、小魚やオタマジャクシなどを食べる。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は、乾いて開けた場所の草が疎らな砂泥地の浅い窪みにつくり、小石や植物片などで内張りをする。
確認状況	秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の水域において2例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地外の水域を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の水域は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うセイタカシギへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5. 12. 20(7) 重要な種の予測結果

予測対象種	アカアシシギ
生態の概要	【分布】日本には旅鳥として全土に現れ、8～10月と4～5月に見られる。 【生態】草原や牧場の水路や沼、その周辺の湿原で見られる。比較的海岸地方で見られる。主に軟体動物や甲殻類、ガガンボの幼虫を食べる。繁殖期は4～6月、一夫一妻で繁殖する。巣は草むらの草株の元や間につくり、草の葉で内張りする。
確認状況	秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において2例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地の水域を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、大阪市は、水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うアカアシシギへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	アオアシシギ
生態の概要	【分布】日本には旅鳥として各地に現れ、8～10月と4～5月に見られる。沖縄県では少数が越冬する。 【生態】寒帯の海岸から山岳までの開けた沼沢地、湖沼縁の湿地、枯れ木の多い荒れ地、蘚類や地衣類の多い灌木地などにすむ。水生昆虫、甲殻類、ミミズ、カエル類や小魚も食べる。繁殖期は4～7月、一夫一妻で繁殖するが、一夫二妻もしばしば記録されている。巣は樹木や石のそばにつくる。
確認状況	秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において14例確認された。渡り途中の休息と思われる。秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の水域（水たまり）及び裸地において3例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の水域や事業計画地外の裸地を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、大阪市は、水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うアオアシシギへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5. 12. 20(8) 重要な種の予測結果

予測対象種	キアシシギ
生態の概要	【分布】日本には旅鳥として全土に現れ、8～10月、5～6月にふつうに見られる。九州、何税諸島では少数が越冬する。 【生態】越冬地や渡り期には、海岸の砂浜、波打ち際や干潟、サンゴ礁、マングローブ林の水ぎわ、河川の砂泥地や砂礫地に現れる。春の渡り期には内陸の河原でもふつうに現れる。甲虫や双翅類などの昆虫をついばむ。繁殖期や繁殖についてはあまりわかっていない。
確認状況	秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において2例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地の水域を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、大阪市は、水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うキアシシギへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	イソシギ
生態の概要	【分布】日本には北海道、本州、四国、九州などに夏鳥として渡来して繁殖する。本州中部以南から沖縄県にかけて、かなりの個体数が越冬する。 【生態】繁殖地では河川、湖沼などにすみ、水田、畑地などにも採食に現れる。礫や砂泥の場所を好み、草が茂ったところはあまり好まない。水辺を歩いて、昆虫をついばんだりほじくり出したりする。繁殖期は4～7月、一夫一妻で繁殖するものが多いが、同時的な一夫二妻、継続的な一夫多妻の例がある。巣は砂地に浅い窪みを掘り、枯れ草を敷いて皿形につくる。
確認状況	秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の水域（池、水たまり）において5例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の水域を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の水域は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うイソシギへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5. 12. 20 (9) 重要な種の予測結果

予測対象種	トウネン
生態の概要	【分布】日本には旅鳥として各地に多数が現れ、ふつうに見られる小型のシギである。 【生態】海岸の砂浜の波打ち際や水溜まり、内湾や河口部の潮間帯の干潟砂泥地、湖沼、溜池、河川の岸辺や中州の砂泥地、水を張った水田など、薄く水につかるところや、乾きかけた平坦な泥地で見られる。ミミズ、ゴカイ類、甲殻類、昆虫、小貝、草の種子などを泥の表面からつまみとったり、軽く突き刺したりして捕える。繁殖期はおそらく5～7月、繁殖の詳しいことはまだわかっていないが、一夫一妻で繁殖する。
確認状況	秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において31例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地の水域を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、大阪市は、水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うトウネンへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	ハマシギ
生態の概要	【分布】日本には旅鳥として8～10月ごろと4～5月頃に現れる。もっともふつうに見られるシギで、渡来数も多い。 【生態】海岸の砂浜、干潟、水溜まり、潟湖、溜池、水を張った水田、内陸の湖沼や大きい河川の砂泥地などに現れる。水生昆虫の幼虫、ミミズ、ゴカイ、ヨコエビなどの甲殻類を食べる。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖するが、同時的一夫二妻、継続的一夫多妻などの記録がある。巣は、草や灌木の根元に浅い窪みをつくり、枯れ草や蘚類を敷く。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地において3例確認された。渡り途中の休息と思われる。秋の渡り期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において20例確認された。渡り途中の休息と思われる。秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の水域（水たまり）において56例確認された。渡り途中の休息と思われる。越冬期調査で、事業計画地外の池及び草地において143例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地や水域を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 草地や水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うハマシギへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5. 12. 20(10) 重要な種の予測結果

予測対象種	ツバメチドリ
生態の概要	【分布】日本では旅鳥又は迷鳥として渡来すると言われていたが、繁殖記録が増えてきた。 【生態】干潟や海岸の湿地草原や荒地・地状草原、干拓地、河口の三角州、砂浜、湖畔、河川敷、河畔や農耕地などで見られ、開けて植生の疎らな露出地面の多いところを好む。空中を飛びながら、飛翔中の昆虫をくわえとって食べる。繁殖期は3～6月、一夫一妻で繁殖する。巣は地上の窪みだが、窪みを掘るかどうかはわかっていない。
確認状況	繁殖期後期調査で、事業計画地の裸地において7例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地の裸地を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 裸地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うツバメチドリへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	コアジサシ
生態の概要	【分布】日本では夏鳥として本州以南の各地で繁殖しているが、限られた繁殖地であるためあまり見られない。 【生態】湖沼、河川、河口などの大きい水系のある河原、砂州、砂浜やその上空で見られる。水面から5～7mぐらいの上空を水面を見ながら飛び回り、魚を見つけるとくちばしから水中に飛び込んで捕えて食べる。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は捕食者が近づきにくい小島や中州などの砂地に浅い窪みを掘ってつくる。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地、水域（池、水たまり、海域）及び広い範囲の上空において756例確認された。主に採餌行動や求愛給餌、堤防での休息が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（池、水たまり、海域）において319例確認された。主に採餌行動や求愛給餌、堤防での休息が確認された。繁殖期後期調査で、事業計画地の草地、裸地及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地、構造物等及び水域（水たまり）において104例確認された。主に採餌行動や地上での休息、水たまりでの水浴びが確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地、裸地、水域等を休息の場や採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。繁殖期間中に工事が予定されている区域内では繁殖期前から営巣防止対策を実施する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 草地や裸地、水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保や水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うコアジサシへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年3月）である。

表 5. 12. 20(11) 重要な種の予測結果

予測対象種	ミサゴ
生態の概要	【分布】日本では北海道から沖縄で少数が繁殖する留鳥だが、冬に海が氷結する地域のは暖地に移動する。 【生態】海岸、大きな川、湖などで採食し、人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上に巣をつくる。近畿圏では営巣地のほとんどが山地で、餌は海や湖沼でとるため行動圏は極めて広い。ボラ、スズキ、トビウオ、イワシなどの魚類だけを食べる。繁殖期は4～7月、年に1回、一夫一妻で繁殖する。岩棚などに流木や枯れ枝を積んで、かなり大きな皿形の巣を雌雄共同でつくり、同じつがいは何年も同じ巣を修復しながら利用することが多い。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地並びに事業計画地外の池及び上空において4例確認された。主に採餌行動が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地の水域（水たまり）において1例確認された。水辺での休息等が確認された。繁殖期後期調査で、事業計画地の裸地及び水域（水たまり）において3例確認された。地上や水辺での休息が確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地、裸地、構造物等及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（水たまり）において42例確認された。主に地上での休息や水たまりでの水浴び、地鳴きが確認された。秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地、裸地、構造物等及び水域（水たまり）並びに事業計画地外の草地、裸地及び水域（水たまり、海域）において51例確認された。主に地上での休息や水たまりでの水浴びが確認された。越冬期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地、裸地及び海域において9例確認された。主に採餌行動や地上での休息が確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地、裸地、水域等を採餌環境や休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 草地や裸地、水辺は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保や水辺を利用する鳥類等の生息場所の保全等について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うミサゴへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年2月）である。

表 5. 12. 20(12) 重要な種の予測結果

予測対象種	カワセミ
生態の概要	【分布】北海道では夏鳥、本州以南では留鳥として全国に繁殖分布する。 【生態】全国の標高900mぐらいまでの河川、湖沼、湿地、小川、用水などの水辺に生息し、ときには海岸や島嶼に生息することもある。水辺の土質の壁にくちばしを使って自力で50～100cmぐらいの深さの巣穴を掘る。水辺の杭や水草、枝などに止まり、餌を見つけると飛び込んで捕食する。3～7cmぐらいのウグイ、オイカワを食べるが、ザリガニ、エビ、カエルなども食べる。繁殖期は3～8月、年に2回繁殖することもある。一夫一妻で繁殖する。
確認状況	秋の渡り期後期調査で、事業計画地外の草地において1例確認された。水辺にある草地での休息が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の草地を休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の草地は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うカワセミへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	アリスイ
生態の概要	【分布】日本では北海道と東北地方の一部で繁殖し、冬は本州南部以南に渡る。 【生態】開けた空き地や草地の多い落葉広葉樹林、カラマツ林、古い木のある庭園、公園、林縁、道路や農耕地の縁などにすみ、特に湿地林、河辺林などを好む。主として疎林の地上で採食するが、ときには藪や樹上の葉の茂みで餌を求める。特にアリ類を好み、他にもいろいろな昆虫や果実を食べる。繁殖期は4～7月で、一夫一妻で繁殖する。巣は洞穴借用型で、雌雄で採した樹幹の割れ目や穴、キツツキの古巣、壁谷土手の穴、巣箱などを利用し、巣材は入れない。
確認状況	秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地において1例確認された。枝先での休息が確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地を休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うアリスイへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>」(中村登流、中村雅彦著、平成7年2月)である。

表 5. 12. 20(13) 重要な種の予測結果

予測対象種	チョウゲンボウ
生態の概要	【分布】日本では本州中部の長野県、山梨県、また栃木県、宮城県などで繁殖し、冬は日本各地に広がる。低地、低山帯から高山帯にかけて幅広く現れる。 【生態】草原、灌木草原、農耕地、河川敷など開闊なところにすみ、空中を旋回して地上を探索し、ホバリング後、急降下して襲う。小哺乳類や小鳥を捕えるが、とくにネズミ類が主要食である。繁殖期は4～7月、一夫一妻で繁殖する。巢は崖の洞穴やカラスなどほかの鳥の古巣につくるが、高い建造物や橋等の人工構造物でも営巣する。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地において3例確認された。主に採餌行動が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において4例確認された。主に採餌行動が確認された。繁殖期後期調査で、事業計画地の草地並びに事業計画地外の裸地及び構造物等において6例確認された。主に採餌行動が確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地及び構造物等において15例確認された。主に採餌行動が確認された。秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地及び裸地並びに事業計画地外の草地及び構造物等において5例確認された。主に採餌行動が確認された。越冬期調査で、事業計画地の草地及び事業計画地外の裸地において2例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地、裸地等を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。 草地や裸地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うチョウゲンボウへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」(中村登流、中村雅彦著、平成7年2月)である。

表 5. 12. 20(14) 重要な種の予測結果

予測対象種	ハヤブサ
生態の概要	【分布】日本では、北海道から九州北西部の島嶼に至るまで広く分布し、特に東北地方と北海道の沿岸部に多い。 【生態】広い空間で狩りをするため、海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野などを生活域にする。獲物はほとんどがヒヨドリ級の中型の小鳥で、まれに地上でネズミやウサギを捕える。冬の漂行を行わないものは年中繁殖地周辺にすみつき、2月上旬から3月にかけて産卵場所に執着し始める。一夫一妻で繁殖する。海岸や海岸に近い山地の断崖の岩棚の窪みに、脚で砂泥や草の根などをかき出して産座をつくり直接産卵する。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地及びその周辺の上空において2例確認された。主に採餌行動が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地の裸地において1例確認された。主に採餌行動が確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地外の構造物等において1例確認された。主に休息が確認された。秋の渡り期後期調査で、事業計画地の草地において3例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地、裸地等及び事業計画地外の構造物等を休息の場や採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地や裸地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うハヤブサへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」(中村登流、中村雅彦著、平成7年2月)である。

表 5. 12. 20(15) 重要な種の予測結果

予測対象種	ヒバリ
生態の概要	【分布】日本では、九州以北から北海道までの全国で繁殖する。 【生態】牧場、草原、河原、農耕地、埋立地に生息するが、丈の低い草がまばらに生え、露出した地面の多い乾燥地を好む。地上を交互歩行しながら餌をあさり、草の実や昆虫をついばむ。2月下旬ごろから徐々に繁殖地に渡来し、4月初旬から7月まで、年に1～3回、一夫一妻で繁殖する。雌だけで地上に巣をつくり、巣は碗型の外径10cmぐらいで、よく草の根元につくる。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において66例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地、裸地及び構造物等において75例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。繁殖期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において104例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において34例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。秋の渡り期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において251例確認された。主に採餌行動や地上での休息、求愛行動（さえずり）、地鳴きが確認された。越冬期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において311例確認された。主に採餌行動や休息が確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地、裸地等を休息の場や採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。 草地や裸地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うヒバリへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年2月）である。

表 5. 12. 20(16) 重要な種の予測結果

予測対象種	オオヨシキリ
生態の概要	【分布】日本には夏鳥として、4月下旬ごろに北海道北・東部と沖縄を除く全国に渡来する。 【生態】全国各地の水辺のヨシ原に生息し、海岸や河口などの低地の湿原や、山地の湖岸や川岸の湿地でふつうに繁殖する。茎から茎へと移動しながら細く尖ったくちばしで昆虫を捕える。雛の餌には鱗翅類の幼虫とクモ類が多く、双翅類や直翅類、鱗翅類の成虫、マイマイなども与える。繁殖期は5～8月、年に1～2回繁殖するが、本州中部以北では年に1回の繁殖がふつう。一夫一妻で繁殖し、雄の10～30%が2～3羽の雌と番う。ヨシの茎にイネ科の葉や茎を用いて碗型の巣をつくる。
確認状況	繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において15例確認された。主に採餌行動や求愛行動（さえずり）が確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うオオヨシキリへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年2月）である。

表 5. 12. 20(17) 重要な種の予測結果

予測対象種	セッカ
生態の概要	【分布】日本では沖縄県から秋田県にかけて分布するが、特に本州中南部に集中し、北陸・東北地方にかけては局地的に分布する。 【生態】低地から山地の草原、水田に生息し、チガヤやカルカヤのようにやや丈が低いイネ科が茂る草原を好む。植物の茎を移動しながら、昆虫、クモ類を食べる。雛が小さいうちはクモ類や鱗翅類の幼虫を、大きくなるとバッタなどの直翅類を給餌する。繁殖期は4月から9月と長く、年に2～3回繁殖するが、つがいの関係は極めて希薄な一夫一妻である。イネ科の若葉をクモの卵囊からとった糸で縫い合わせて上部に穴のある楕円形の巣をつくる。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地及びその周辺の草地及び裸地において35例確認された。主に求愛行動（さえずり）や採餌行動、地鳴きが確認された。繁殖期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において54例確認された。主に求愛行動（さえずり）や採餌行動が確認された。繁殖期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において76例確認された。主に求愛行動（さえずり）や採餌行動、地鳴きが確認された。秋の渡り期前期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において9例確認された。主に採餌行動や地鳴きが確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地、裸地を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。 草地や裸地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。また、大阪市は、裸地を利用する鳥類の飛来場所の確保について、専門家の意見を聴きながら引き続き対応を検討するとしている。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うセッカへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	エゾビタキ
生態の概要	【分布】日本には旅鳥として春と秋に通過するが、多くの地方では秋の方が多い。 【生態】低山や平地の林、市街地の庭園にも現れる。樹木の下枝に止まり場を構え、チョウ、ガ、ウンカ、アブなどの飛翔する昆虫をフライングキャッチ法で捕獲する。
確認状況	秋の渡り期前期調査で、事業計画地の草地において1例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の草地を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うエゾビタキへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年2月）である。

表 5. 12. 20(18) 重要な種の予測結果

予測対象種	ホオアカ
生態の概要	【分布】日本では北海道、本州、四国、九州の各地で夏鳥として繁殖し、冬は本州の南西部以南で越冬する。 【生態】低地、低山帯、亜高山帯の草原、あるいは草原状のところにすむ。山地草原、泥炭草原、牧草地、水田、低木や藪の疎らな草原など、あらゆる草原で見られる。草が茂る地上や低木、藪の茂みで採食する。イネ科、タデ科などの小粒で乾いた種子などをつまみ上げて食べる。雛に運んでくる餌はほとんどが昆虫で、直翅類や鱗翅類の幼虫・成虫が多い。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は草むらの間や草株の上、藪の枝の上などに置くようにつくる。巣は碗型。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地外の草地において1例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地外の草地を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 事業計画地外の草地は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うホオアカへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	アオジ
生態の概要	【分布】日本では本州の中部以北、北海道で繁殖する。冬は本州南西部、四国、九州から台湾、中国南部にかけてすごす。 【生態】山地帯上部から亜高山帯下部にかけての比較的乾いた明るい林にすみ、疎林で藪が多いところ、林縁、若木林などを好む。ほとんどが地上で採食する。タデ科、イネ科などの種子、ズミ、イボタノキなどの果実、夏には昆虫の成虫・幼虫も食べる。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。巣づくりは雌のみが行い、地上1～2mぐらいの藪の中に枝の又上に乗せるようにつくる。
確認状況	春の渡り期調査で、事業計画地の草地において2例確認された。渡り途中の休息と思われる。越冬期調査で、事業計画地の草地において2例確認された。渡り途中の休息と思われる。
予測結果	本種は事業計画地の草地を一時的な休息の場として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うアオジへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年2月）である。

表 5. 12. 20(19) 重要な種の予測結果

予測対象種	オオジュリン
生態の概要	【分布】日本では北海道で夏鳥として繁殖し、本州の東北地方でも繁殖が確認された。本州以南には冬鳥として渡来し、特に関東地方以南に多い。 【生態】湿地帯とその周辺の草原にすむ。繁殖地では水湿地のヨシ草原から、その周辺の丈の低いクサヨシやスゲの草原で見られる。ヨシ原の地上や茎で採食する。枯れたヨシの茎で葉鞘をむしって越冬中のワタムシ類を取り出す。稲刈り後の二次出穂の種子をついばむ。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は草株の根元の地上や草株の上、藪の小枝の中に置くようにつくる。
確認状況	秋の渡り期後期調査で、事業計画地及びその周辺の草地において3例確認された。主に採餌行動が確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地を採餌環境として利用していると考えられる。 高層建築物については、ガラスなどの建物外壁面の反射を低減するよう、材質の選定に努める。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うオオジュリンへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	トノサマガエル
生態の概要	【分布】本州（関東平野、仙台平野を除く）、四国、九州、北海道の一部（人為移入）に分布する。 【生態】池や湿地、沼、河川などにもいるが、水田で見られる代表的なカエル。やや大きめの中型で均整の取れたスマートなカエル。繁殖期は4～6月であるが、水田を繁殖場所に行っている場合は、水田の水利管理に影響される。卵塊はつぶれた円形状で、1,800～3,000個の卵が内包されている。
確認状況	春季調査で、事業計画地の草地において1例確認された。初夏調査で、事業計画地の草地において1例確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地を利用していると考えられる。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うトノサマガエルへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本野鳥生態図鑑＜陸鳥編＞」（中村登流、中村雅彦著、平成7年2月）、「決定版 日本の両生爬虫類」（内山りゅう、前田憲男、沼田研児、関慎太郎著、2002年9月）である。

表 5. 12. 20 (20) 重要な種の予測結果

予測対象種	セスジイトトンボ
生態の概要	【分布】国内では、北海道(稀)、本州、四国、九州に分布する。近畿地方では広く分布するが、沖積低地の氾濫原、琵琶湖などの湖沼、緩やかな河川、及びその周辺に産地が多い。 【生態】平地、丘陵地の抽水植物や浮葉植物が繁茂する緩やかな流れや池沼、湖に生息する。幼虫は水生植物の付近に見られる。成虫出現時期は4月中旬～10月中旬。5～9月に多い。卵期7～9日。幼虫期60～250日。1年2世代型。未熟個体や雌は周囲の草むらで見られる。成熟雄は水面の浮葉植物等に静止して縄張りをもつ。
確認状況	夏季調査で、事業計画地及びその周辺の草地において約10個体ずつが確認された。
予測結果	本種は事業計画地及びその周辺の草地を利用していると考えられる。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うセスジイトトンボへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	ナツアカネ
生態の概要	【分布】国内では北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島に分布する。近畿地方全般に見られるが、地域によっては激減しているところもある。 【生態】生息環境は、平地から低山地の岸辺に草原のある池沼、水田、湿地。幼虫は植物性沈積物の陰や砂泥上にうずくまっている。成虫出現時期は6月下旬～11月下旬。9月中旬から10月に多い。卵期65～165日。幼虫期約120日。1年1世代型。羽化の時期はアキアカネより遅れ、時間帯は多くは夜間に行われる。未熟期は近くの林に移って過ごし、アキアカネほど顕著な移動は見られない。成熟雄は水辺に静止して雌を待つが、はっきりした縄張り性は見られない。
確認状況	秋季調査で、事業計画地外の水域（水たまり）において4個体が確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の水域を利用していると考えられる。 事業計画地外の池は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うナツアカネへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「近畿のトンボ図鑑」（山本哲央、新村捷介、宮崎俊行、西浦信明著、2009年7月）である。

表 5. 12. 20 (21) 重要な種の予測結果

予測対象種	クロケブカゴミムシ
生態の概要	【分布】本州、四国、九州、琉球 【生態】7～8.5cm、イグチケブカゴミムシに似ているが、上翅に金銅光沢がなく黒色、前胸の最広部はまるく、イグチケブカゴミムシのように突き出さない。後ろ角はより幅広い鈍歯状。
確認状況	夏季調査で、事業計画地におけるライトトラップ法により1個体確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地等を利用していると考えられる。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うクロケブカゴミムシへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	ケシゲンゴロウ
生態の概要	【分布】北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島（沖永良部島以北）、朝鮮半島、ロシア極東部 【生態】止水域に生息し、落ち葉の堆積した薄暗い場所から開けた水田まで、様々な環境で見られる。かつては普通種の代表であったが、2000年代以降、全国的に減少している。幼虫は島根県では5～7月に確認された。
確認状況	春季調査で、事業計画地におけるライトトラップ法により1個体確認された。また、事業計画地外の池で1個体確認された。夏季調査で、事業計画地におけるライトトラップ法により1個体確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地等や事業計画地外の池を利用していると考えられる。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うケシゲンゴロウへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)」(上野俊一、黒澤良彦、佐藤正孝著、昭和60年1月)、「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」(中島淳、林成多、石田和男、北野忠、吉富博之著、2020年2月)である。

表 5. 12. 20 (22) 重要な種の予測結果

予測対象種	コガムシ
生態の概要	【分布】北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島、朝鮮半島、中国、ロシア極東部 【生態】止水域に生息し、水田などの浅い湿地を好む。生息地での個体数は多いが全国的に減少傾向にあり、南西諸島では絶滅寸前である。突起のある直径1.5cmほどの卵のうを産み、幼虫は5～6月に確認された。幼虫は捕獲した獲物を水面上に持ち上げて食べる習性がある。
確認状況	夏季調査で、事業計画地におけるライトトラップ法により5個体確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地等を利用していると考えられる。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うコガムシへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	ジュウクホシテントウ
生態の概要	【分布】北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国（北部）、ウスリー 【生態】3.8～4.1mm。淡黄色で、頭部に1対、前胸背板に3対、上翅に19個の黒点があるが、一部あるいはほとんどが消失することがある。
確認状況	春季調査で、事業計画地外の草地において任意採取法により1個体確認された。秋季調査で、事業計画地外の草地において任意採取法により1個体確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の草地を利用していると考えられる。 事業計画地外の草地は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うジュウクホシテントウへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」(中島淳、林成多、石田和男、北野忠、吉富博之著、2020年2月)、「原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)」(黒澤良彦、久松定成、佐々治寛之著、昭和60年11月)である。

表 5. 12. 20 (23) 重要な種の予測結果

予測対象種	ジュウサンホシテントウ
生態の概要	【分布】北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国、シベリア、モンゴル、ヨーロッパ、中央アジア、北アメリカ。 【生態】5.6～6.2mm。前胸背板中央部は前縁を除き黒色、上翅は橙色地に13個の黒紋があるが、しばしば一部が消失する。
確認状況	春季調査で、事業計画地の草地において任意採取法により1個体確認された。
予測結果	本種は事業計画地の草地を利用していると考えられる。 工事の実施にあたっては、国土交通省指定の低騒音型建設機械の採用等により、騒音の発生の抑制に努めるとともに、空ぶかしの防止、アイドリングストップの励行等、適切な施工管理を行う。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。 草地は事業計画地周辺や夢洲以外の大阪湾岸にも存在しており、これらの環境を利用可能であると考えられるが、供用後の人の往来や照明設備の影響が小さい場所において多様な草丈の草地の確保に努める。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うジュウサンホシテントウへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	コフキトンボ
生態の概要	【分布】国内では北海道、本州、四国、九州、沖縄県に分布するが、北海道、東北地方、九州南部では産地は限られる。 【生態】生息環境は、平地から丘陵地のヨシなどのある開放的な池沼、河川敷の淀み。汽水域でも見られる。幼虫は水生植物付近や沈積物の陰に潜んでいる。成虫出現時期は5月下旬～10月上旬。6月から7月上旬に多い。卵期6～16日。幼虫期最短90日。1年1～2世代型。羽化は主に夜間に行われる。9月頃の羽化殻は小型で、年2化する可能性も考えられる。生息地では成熟、未熟、雄雌入り乱れて水域の植物などに静止する光景が見られる。
確認状況	春季調査で、事業計画地外の池において1個体確認された。夏季調査で、事業計画地外の池において3個体確認された。
予測結果	本種は事業計画地外の池を利用していると考えられる。 事業計画地外の池は本事業により改変されないが、工事の実施にあたっては、工事関係者の事業計画地外への不要な立ち入りを防止するなど適切に対応する。夜間工事を行う場合は、照明器具の適正配置等により、事業計画地周辺に生息する動物への影響を可能な限り低減する。また、公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出することから、事業計画地及びその周辺の池等の水質への影響はないものと考えられる。 以上のことから、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴うコフキトンボへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)」(黒澤良彦、久松定成、佐々治寛之著、昭和60年11月)、「近畿のトンボ図鑑」(山本哲央、新村捷介、宮崎俊行、西浦信明著、2009年7月)である。

(d) 評 価

(7) 環境保全目標

高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴う陸域動物の環境保全目標は、表 5. 12. 21 に示すとおりであり、本事業の実施が事業計画地及びその周辺に及ぼす影響について、予測結果を環境保全目標と照らし合わせて評価した。

表 5. 12. 21 環境保全目標

環境影響要因	環境保全目標
高層建築物の存在、建設機械の稼働、土地の改変	・ 環境への影響を最小限にとどめるよう、環境保全について配慮されていること。 ・ 法令を遵守するとともに、国、大阪府及び大阪市の自然環境に関する計画又は方針に定める目標の達成と維持に支障を及ぼさないこと。 ・ 事業計画地及びその周辺における陸域動物、水生生物の生息環境に著しい影響を及ぼさないこと。 ・ 事業計画地及びその周辺における陸域動物、水生生物の生息環境の創出に配慮していること。

(4) 評価結果

高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴う陸域動物への影響は、予測結果に記載したとおり可能な限り低減されているものと予測される。

さらに、事業の実施にあたっては、以下の環境保全対策を実施することにより、高層建築物の存在、建設機械の稼働及び土地の改変に伴う影響を最小限にとどめるようにする計画である。

- ① ライトアップ等に関する照明については、事業特性上必要と考える夜間照明を確保しつつ、光量や照射方向をコントロールできる設備の導入及び配置を検討する。
- ② 裸地を利用する鳥類の繁殖期間中に工事が予定されている区域内では、繁殖期前から営巣防止対策を実施する。

以上のことから、本事業の実施が陸域動物に及ぼす影響は、最小限にとどめるよう環境保全について配慮されており、環境保全目標を満足するものと評価する。

5.12.2 海域動物

(1) 調 査

(a) 調査概要

事業計画地周辺の海域における海域動物の状況を把握するため、資料調査及び現地調査を実施した。

資料調査の内容は表 5.12.22 に、収集・整理を行った既存資料は表 5.12.23 に、既存資料の調査地点及び範囲は図 5.12.3 にそれぞれ示すとおりである。また、現地調査の内容は表 5.12.24 に、現地調査地点は図 5.12.4 にそれぞれ示すとおりである。

なお、重要な種の選定基準は、表 5.12.25 に示すとおりである。

表 5.12.22 資料調査の内容

調査項目	調査方法
○海域動物の生息状況等	事業計画地周辺の海域における海域動物の生息状況等に関する既存資料の収集・整理

表 5.12.23 既存資料

No.	既存資料名	対象データの範囲
1	「大阪湾生き物一斉調査 情報公開サイト」（大阪湾環境データベース（近畿地方整備局神戸港湾空港技術調査事務所）、平成24～令和3年度分、令和5年5月閲覧）	天保山、野鳥園臨港緑地
2	「大阪港新島地区埋立事業及び大阪沖埋立処分場建設事業に係る事後調査報告書」（国土交通省近畿地方整備局、大阪港湾局、大阪湾広域臨海環境整備センター、平成17～令和3年度分）	大阪沖埋立処分場（地点2～5）
3	「処分場自然共生調査（海生生物生育状況調査）報告書」（大阪湾広域臨海環境整備センター、平成24～令和4年度分）	大阪沖埋立処分場（地点c-1～c-3）
4	国土交通省水情報国土データ管理センターホームページ「河川環境データベース 河川水辺の国勢調査」（平成16～29年度分、令和5年5月閲覧）	淀川「淀淀淀1（淀川河口）」の範囲 ※純淡水魚は除外した
5	「大阪湾における人工護岸の潮下帯付着生物相について」（大阪市立自然史博物館、自然史研究、2004、vol. 3、No.3）	舞洲
6	「大阪府の汽水域・砂浜域の無脊椎動物および藻類相」（大阪市立自然史博物館、自然史研究、2014、vol. 3、No.15）	大阪市周辺海域（地点A～D）
7	「北港テクノポート線建設事業に係る事後調査報告書」（株式会社大阪港トランスポートシステム、大阪市、平成16～19年度分）	大阪市住之江区周辺海域（St. I、St. II）
8	大阪府ホームページ「海域の水生生物調査結果」（平成20～令和3年度分、令和5年5月閲覧）	大阪市周辺海域（地点0-1～7、C-3）
9	「2025年日本国際博覧会環境影響評価書」（公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、令和4年6月）	夢洲周辺海域

表 5. 12. 24 現地調査の内容

調査項目	調査地点及び範囲		調査時期 及び頻度	調査方法
動物プランクトン	事業計画地の近傍海域 4 地点	海底面上 1 m から海面まで	4 回/年 (四季)	北原式定量ネットを用いて鉛直曳きを行い試料採取し、種組成及び現存量を記録する。
魚卵・稚仔魚		海面表層		まるちネットを用いて水平曳きを行う。ネットの口径の2/3が水没するようロープ長を調整し、約 2 ノットの速度で10分間曳網し、試料採取する。種組成及び個体数を記録する。
底生生物		海底表面		スミスマッキンタイヤ型採泥器により、3 回採泥し、1 mm のふるいにかかけ、残ったものを試料とし、種組成、現存量を記録する。
漁業生物	事業計画地の近傍海域 1 地点	海面表層・中層		刺網により捕獲した魚類の種類と個体数を記録する。鉛直方向15m、水平方向300mの網を円弧状に日中に設置後、約 1 時間で回収する。
		海底表面		刺網により捕獲した魚類の種類と個体数を記録する。鉛直方向 1 m、水平方向 50m の網を海底から 1 m 程度の底層に設置し、翌日回収する。
付着生物 (動物)	事業計画地の近傍海域 3 地点	潮上帯から海底面まで		ダイバー（スクーバ式 2 名）による連続観察を行う。潮上帯から海底面までの岸壁を鉛直方向に観察し、1 m × 1 m の枠を用いて枠内の生物の種組成及び量（被度）を記録する（目視観察調査）。
		3 層（平均水面、大潮最低低潮面、大潮最低低潮面 - 1 m）		坪刈りを実施する。3 層において、0.25 m × 0.25 m 枠の内側の生物を金属製のヘラ等によって岸壁から採取し、種類別の現存量を記録する。岸壁から採取した付着生物は、海底に落とさず、ダイバーが回収する（枠取り調査）。

（注）調査期間は、以下に示すとおりである。

〔冬季〕 令和 2 年 2 月 19 日（水）～20 日（木）

〔春季〕 令和 2 年 5 月 13 日（水）～14 日（木）

〔夏季〕 令和 2 年 8 月 11 日（火）～12 日（水）

〔秋季〕 令和 2 年 10 月 12 日（月）～13 日（火）

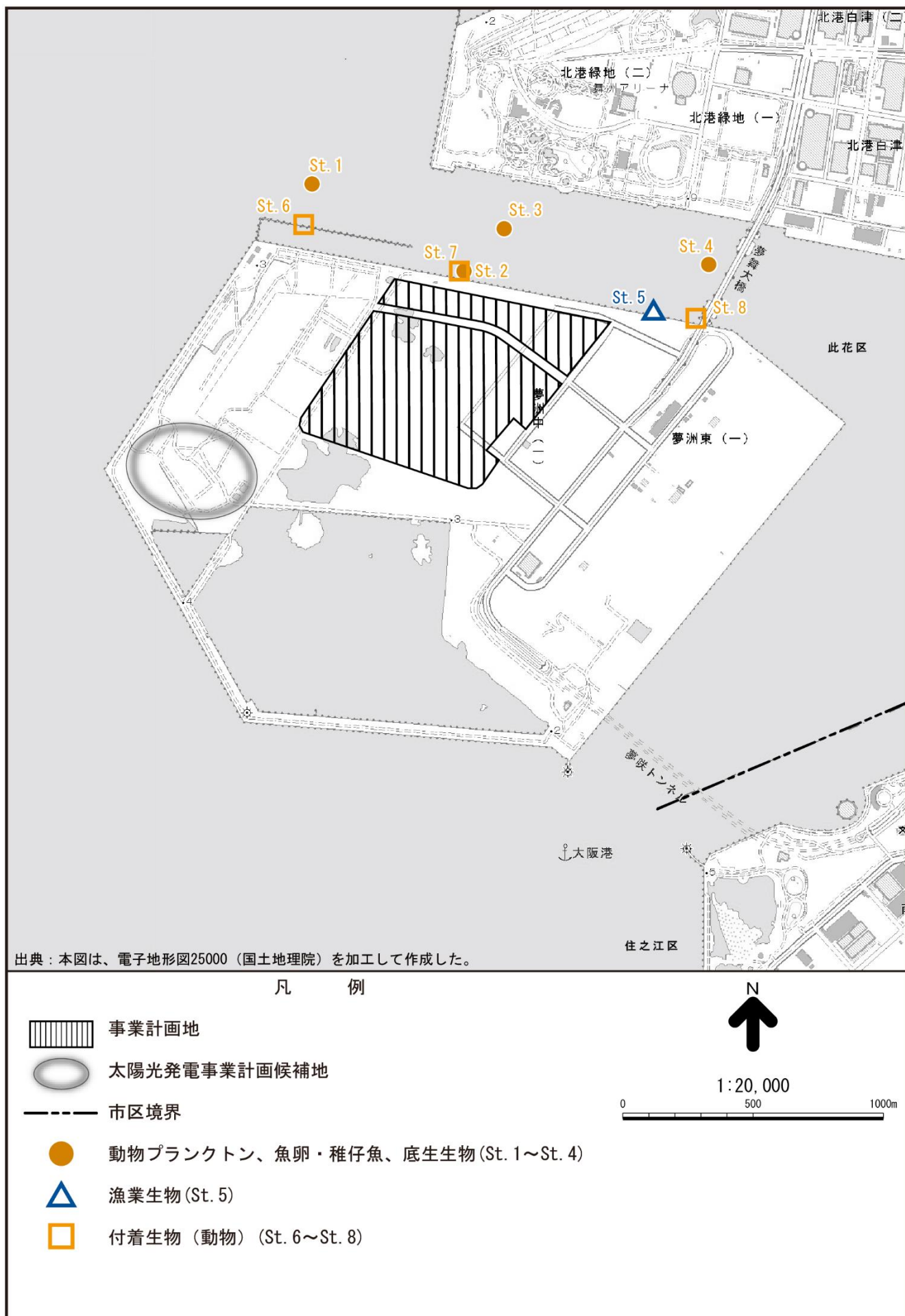


図 5.12.4 現地調査地点

表 5. 12. 25 重要な種の選定基準

No.	略 称	法律・条令、文献等	選定基準となる区分
①	文化財	文化財保護法	特：特別天然記念物 天：国指定天然記念物
		大阪府文化財保護条例	府：府指定天然記念物
		大阪市文化財保護条例	市：市指定天然記念物
②	保存法	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律	国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種 緊急：緊急指定種
③	国 RL	環境省レッドリスト 2020（環境省、令和 2 年 3 月） 及び「環境省版海洋生物レッドリスト 2017」（環境省、平成 29 年）	EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧ⅠA類 EN：絶滅危惧ⅠB類 CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群
④	水産庁 RL	日本の希少な野生水生生物に関するデータブック（水産庁編）（公益社団法人日本水産資源保護協会、平成 10 年）	普通 減傾：減少傾向 減少 希少 危急 危惧：絶滅危惧 地域：地域個体群
⑤	府 RL	大阪府レッドリスト 2014（大阪府、平成 26 年 10 月）	EX：絶滅 CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足

(b) 調査結果

(7) 資料調査結果

事業計画地周辺の海域における資料調査の結果から確認された種は、表 5. 12. 26 に示すとおりである。このうち重要な種に該当する種は表 5. 12. 27 に示すとおりであり、89 種が確認されている。

表 5. 12. 26 資料調査結果

調査項目	確認種数	確認種
動物プランクトン	10門22綱38目 70科157種	多毛綱の幼生、橈脚亜綱のノープリウス幼生、 <i>Favella ehrenbergii</i> 、 <i>Tintinnopsis</i> sp.、 <i>Synchaeta</i> sp.、 <i>Strombidium</i> sp.、 <i>Oikopleura</i> sp.、 <i>Favella taraikaensis</i> 、 <i>Mesodinium rubrum</i> 等
魚卵・稚仔魚	1門1綱5目 11科14種	カタクチイワシ、サッパ、ナベカ属、イソギンポ科 等
底生生物及び 付着生物（動物）	13門31綱77目 260科659種	(底生生物) シノブハネエラスピオ、ハナオカカギゴカイ、シズクガイ、 カタマガリギボシイソメ、ドロソコエビ属、アシナガゴカイ 等 (付着生物) カンザシゴカイ科、ムラサキイガイ、普通海綿綱、アラレタマキビ、イソギンチャク目、外肛動物門、レイシガイ、キヒトデ、カラマツガイ 等
漁業生物	4門9綱17目 57科116種	ボラ、クロダイ、カサゴ、マナマコ、コノシロ、カタクチイワシ、マダコ、スズキ 等

- (注) 1. 動物プランクトンの種類数は、同一種でも発生段階が異なる場合は、各々1種として計数した。
2. 既存資料調査において底生生物と付着生物の区分がされていない場合や、いずれの項目においても出現する種が見られたため、確認種数は双方を合わせたものを表記した。
3. 確認種の欄には、比較的出現頻度の高い種を記載した。
4. 各項目で出現する種は、項目間で重複する場合がある。

表 5. 12. 27(1) 資料調査により確認された重要な種

No.	門名	種名	既存資料番号									重要な種の選定基準				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	①	②	③	④	⑤
1	刺胞動物門	イシワケイソギンチャク	○					○								DD
2	扁形動物門	コガタオオヒラハイキュウチュウ						○								DD
3	軟体動物門	イシマキガイ	○			○		○							減少	
4		ヒナユクスズメガイ	○					○						NT		VU
5		ウミニナ	○											NT	減傾	NT
6		フトヘナタリガイ						○						NT		NT
7		カワグチツボ						○						NT		NT
8		クリイロカワザンショウガイ						○						NT		NT
9		カワザンショウガイ				○		○								NT
10		エドガワミズゴマツボ						○		○				NT		NT
11		ミズゴマツボ						○						VU	希少	VU
12		ハナヅトガイ					○							NT		
13		クレハガイ						○						NT		NT
14		アカニシ	○	○				○	○						減少	
15		クサブリクチキレ						○								NT
16		ヨコイトカケギリガイ						○								DD
17		ヨコスジギリ	○		○		○	○								NT
18		イトコクチキレ					○									NT
19		ウスコミミガイ	○					○						NT		VU
20		ナギサノシタタリガイ						○								VU
21		アカガイ		○											減少	
22		イワガキ			○										減傾	
23		タイラギ		○										NT	減少	NT
24		オウギウロコガイ	○							○				CR+EN		
25		チリハギガイ						○								NT
26		ウネナシトマヤガイ	○			○		○						NT		
27		ヤマトシジミ				○		○						NT		NT
28		カガミガイ								○						NT
29		ヒメカノコアサリ								○	○					NT
30		ユウシオガイ								○				NT		VU
31		クチバガイ						○						NT		
32		ソトオリガイ						○								NT
33		オオノガイ	○					○						NT		VU
34	環形動物門	ハナオカカギゴカイ						○		○	○					DD
35		カサネシリス	○					○								DD
36		カキモトシリス			○			○			○					VU
37		ヒメヤマトカワゴカイ						○								DD
38		ヤマトカワゴカイ						○								DD
39		ウチワゴカイ						○						NT		VU
40		ヒトツブゴカイ			○			○								NT
41		イトメ								○				NT		
42		スゴカイイソメ								○						VU
43		ツバサゴカイ			○						○			EN		VU
44		イソタマシキゴカイ	○				○	○								DD
45		タマシキゴカイ	○					○								NT
46		ニッポンフサゴカイ						○								NT

(注) 1. 分類及び配列は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(河川環境データベース、令和4年11月)等に準拠した。

2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 25 に示すとおりである。

表 5. 12. 27(2) 資料調査により確認された重要な種

No.	門名	種名	既存資料番号									重要な種の選定基準				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	①	②	③	④	⑤
47	節足動物門	ヒトハリザトウムシ						○						NT		
48		シマドロソコエビ				○										NT
49		オオサカドロソコエビ						○						DD		CR+EN
50		ウエノドロクダムシ			○											DD
51		ニホンドロクダムシ				○										NT
52		タイリクドロクダムシ						○								DD
53		フトヒゲカマキリヨコエビ					○									DD
54		コウベウミナナフシ						○								DD
55		ヒガタスナホリムシ						○						NT		VU
56		ヒメコツブムシ						○						DD		VU
57		トンダガワイソコツブムシ						○								DD
58		ヨツバコツブムシ						○								NT
59		ナナツバコツブムシ						○								DD
60		ニホンハマワラジムシ						○						DD		
61		クロイサザアミ						○								DD
62		ニホンイサザアミ						○								DD
63		クルマエビ		○												NT
64		ヨモギホンヤドカリ						○						NT		
65		ハサミシャコエビ						○								NT
66		トゲノコギリガザミ						○							減少	
67		フジテガニ						○						NT		NT
68		クシテガニ						○						NT		
69		ユビアカベンケイガニ						○						NT		NT
70		ベンケイガニ						○						NT		
71		ハマガニ						○						NT		
72		モクズガニ	○			○		○							減傾	
73		ヒメアシハラガニ						○						NT		NT
74		ヒメケフサイソガニ						○						NT		VU
75		オオヒライソガニ						○								NT
76		チゴガニ						○								VU
77		コメツキガニ						○								NT
78		オサガニ						○						NT		NT
79		オオヨコナガピンノ									○			EN		
80		ハクセンシオマネキ	○					○						VU		
81		スナガニ						○								NT
82		メナシピンノ									○			NT		
83	棘皮動物門	ヒモイカリナマコ						○								NT
84		ムラサキウニ			○										普通	
85	脊ついで(椎)動物門	アユ				○										NT
86		タケノコメバル	○											NT		
87		コイチ		○										EN		
88		アイナメ	○		○				○					LP		
89		チワラスボ		○										EN		

(注) 1. 分類及び配列は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(河川環境データベース、令和4年11月)等に準拠した。

2. 重要な種の選定基準は、表 5. 12. 25 に示すとおりである。

(イ) 現地調査結果

(i) 動物プランクトン

動物プランクトンの季節別沈殿量の調査結果は表 5. 12. 28 に、動物プランクトンの季節別出現状況は表 5. 12. 29 に示すとおりである。

季節別の平均沈殿量は、冬季が 37.7mL/m³、春季が 18.8mL/m³、夏季が 3.0mL/m³、秋季が 1.0mL/m³であった。四季を通じた総出現種類数は 44 種類であり、冬季が 27 種類、春季が 21 種類、夏季が 21 種類、秋季が 27 種類であった。優占して出現した種類は、繊毛虫門に属する *Amphorellopsis acuta*、節足動物門に属する橈脚亜綱のノープリウス幼生、蔓脚亜綱のノープリウス幼生、*Oithona davisae*、*Oithona* spp. のコペポダイト幼生等となっている。

表 5. 12. 28 動物プランクトンの季節別沈殿量の調査結果

項 目	調査時期											
	冬 季			春 季			夏 季			秋 季		
	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均
沈殿量 (mL/m ³)	1.9	54.5	37.7	14.2	24.3	18.8	2.7	3.5	3.0	0.7	1.4	1.0

表 5. 12. 29 動物プランクトンの季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種類数 [44]		27	21	21	27
出現 個体数 (個体/m ³)	平均	34,811	86,385	62,936	18,740
	最小～最大	2,411～53,801	74,099～97,780	50,129～86,257	11,607～29,457
主な 出現種 (%)	繊毛虫門	—	<i>Amphorellopsis acuta</i> (28.1)	—	—
	輪形動物門	—	—	<i>Brachionus plicatilis</i> (10.3)	—
	軟体動物門	umbo Larva of BIVALVIA (12.7)	—	—	—
	節足動物門	nauplius of COPEPODA (36.2)	<i>Podon polyphemoides</i> (16.2)	<i>Oithona davisae</i> (24.7)	nauplius of CIRRIPIEDIA (19.5)
		<i>Oithona</i> spp. (copepodite) (15.6)	nauplius of COPEPODA (13.2)	<i>Oithona</i> spp. (copepodite) (10.6)	<i>Oithona</i> spp. (copepodite) (17.3)
		<i>Paracalanus</i> spp. (copepodite) (8.4)	<i>Evadne nordmanni</i> (5.1)	<i>Acartia</i> sp. (copepodite) (10.2)	<i>Paracalanus</i> spp. (copepodite) (11.9)
				nauplius of COPEPODA (10.1)	<i>Oithona brevicornis</i> (11.3)
	脊索動物門	—	<i>Oikopleura dioica</i> (6.3)	<i>Paracalanus</i> spp. (copepodite) (8.4)	<i>Paracalanus crassirostris</i> (7.9)
				<i>Podon polyphemoides</i> (6.1)	nauplius of COPEPODA (7.9)
		—		—	—

- (注) 1. 出現種類数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種類数を示す。
2. 主な出現種の()内の数値は、総出現個体数に対する組成比率(%)を示す。
3. 主な出現種は、組成比率が5%以上のものを記載した。

(ii) 魚卵・稚仔魚

① 魚 卵

魚卵の季節別出現状況は、表 5. 12. 30 に示すとおりである。

四季を通じた総出現種類数は 3 種類であり、春季のみ出現した。平均出現個体数は 232 個体/1, 000m³であり、主な出現種は、カタクチイワシ、ネズッポ科となっている。

表 5. 12. 30 魚卵の季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種類数 [3]		0	3	0	0
出現 個体数 (個体/1, 000m ³)	平均	—	232	—	—
	最小～最大	—	8～644	—	—
	主な 出現種 (%)	—	カタクチイワシ (81. 2) ネズッポ科 (11. 6)	—	—

- (注) 1. 出現種類数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種類数を示す。
 2. 出現個体数は、種同定できなかった単脂球形卵の個体数を含めて算出している。
 3. 主な出現種の()内の数値は、総出現個体数に対する組成比率(%)を示す。
 4. 主な出現種は、組成比率が 5 %以上のものを記載した。

② 稚仔魚

稚仔魚の季節別出現状況は、表 5. 12. 31 に示すとおりである。

四季を通じた総出現種類数は 17 種類であり、冬季が 4 種類、春季が 7 種類、夏季が 7 種類、秋季が 3 種類であった。平均出現個体数は、冬季が 16 個体/1, 000m³、春季が 147 個体/1, 000m³、夏季が 198 個体/1, 000m³、秋季が 29 個体/1, 000m³であり、主な出現種は、カサゴ、コノシロ、カタクチイワシ、イソギンポ、イソギンポ科、ナベカ属、ハゼ科となっている。

表 5. 12. 31 稚仔魚の季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種類数 [17]		4	7	7	3
出現 個体数 (個体/1, 000m ³)	平均	16	147	198	29
	最小～最大	10～20	70～241	109～298	11～60
	主な 出現種 (%)	カサゴ (93. 8)	コノシロ (44. 9) カタクチイワシ (18. 3) イソギンポ (17. 4) ハゼ科 (7. 5)	ナベカ属 (85. 1) ハゼ科 (12. 5)	イソギンポ科 (93. 2)

- (注) 1. 出現種類数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種類数を示す。
 2. 主な出現種の()内の数値は、総出現個体数に対する組成比率(%)を示す。
 3. 主な出現種は、組成比率が 5 %以上のものを記載した。

(iii) 底生生物

底生生物の季節別出現状況は、表 5.12.32 に示すとおりである。

四季を通じた総出現種類数は56種類であり、冬季が27種類、春季が37種類、夏季が11種類、秋季が9種類であった。主な出現種は、軟体動物のシズクガイ、環形動物のシノブハネエラスピオ、*Sigambra* sp. となっている。

表 5.12.32 底生生物の季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種類数 [56]		27	37	11	9
出現 個体数 (個体/0.15 m ²)	軟体動物	14	297	0	0
	環形動物	1,082	764	709	1,114
	節足動物	3	2	0	0
	その他	3	17	3	2
組成比率 (%)	軟体動物	1.3	27.5	0.0	0.0
	環形動物	98.2	70.7	99.6	99.8
	節足動物	0.3	0.2	0.0	0.0
	その他	0.3	1.6	0.4	0.2
主な 出現種 (%)	軟体動物	—	シズクガイ (23.3)	—	—
	環形動物	シノブハネエラス ピオ (87.0)	シノブハネエラス ピオ (62.4)	シノブハネエラス ピオ (85.4) <i>Sigambra</i> sp. (9.4)	シノブハネエラス ピオ (95.5)

- (注) 1. 出現種類数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種類数を示す。
2. 組成比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。
3. 主な出現種の()内の数値は、総出現個体数に対する組成比率(%)を示す。
4. 主な出現種は、組成比率が5%以上のものを記載した。

(iv) 漁業生物

囲刺網による漁業生物の季節別出現状況は、表 5. 12. 33 に示すとおりである。

四季を通じた総出現種数は 5 種であり、冬季が 1 種、春季が 1 種、夏季が 1 種、秋季が 2 種であった。出現個体数は、冬季が 1 個体/網、春季が 1 個体/網、夏季が 1 個体/網、秋季が 2 個体/網であり、出現種は、スズキ、カンパチ、ボラ、ブリ、カタクチイワシとなっている。

表 5. 12. 33 漁業生物（囲刺網）の季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種数 [5]		1	1	1	2
出現 個体数 (個体/網)	スズキ	1	—	—	—
	カンパチ	—	1	—	—
	ボラ	—	—	1	—
	ブリ	—	—	—	1
	カタクチイワシ	—	—	—	1
	合計	1	1	1	2

(注) 出現種数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種数を示す。

底刺網による漁業生物の季節別出現状況は、表 5. 12. 34 に示すとおりである。

四季を通じた総出現種数は 5 種であり、冬季が 2 種、春季が 2 種、夏季が 3 種、秋季が 2 種であった。出現個体数は、冬季が 13 個体/網、春季が 8 個体/網、夏季が 10 個体/網、秋季が 3 個体/網である。

表 5. 12. 34 漁業生物（底刺網）の季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種数 [5]		2	2	3	2
出現 個体数 (個体/網)	カサゴ	12	7	8	2
	マタナゴ	1	—	1	—
	ホウボウ	—	1	—	—
	カタクチイワシ	—	—	1	—
	コノシロ	—	—	—	1
	合計	13	8	10	3
組成比率 (%)	カサゴ	92. 3	87. 5	80. 0	66. 7
	マタナゴ	7. 7	—	10. 0	—
	ホウボウ	—	12. 5	—	—
	カタクチイワシ	—	—	10. 0	—
	コノシロ	—	—	—	33. 3

(注) 出現種数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種数を示す。

(v) 付着生物（動物）

① 目視観察調査

目視による付着生物（動物）の季節別出現状況は、表 5.12.35 に示すとおりである。

四季を通じた総出現種類数は 35 種類であり、冬季が 23 種類、春季が 26 種類、夏季が 23 種類、秋季が 24 種類であった。主な出現種は、軟体動物のマガキ、ムラサキイガイ、環形動物のカンザシゴカイ科、節足動物のタテジマフジツボ、その他のチギレイソギンチャク、ヒドロ虫綱、イトマキヒトデ、苔虫綱、アミコケムシ科等となっている。

表 5.12.35 付着生物（動物・目視観察）の季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種類数	軟体動物 〔13〕	9	8	6	9
	環形動物 〔 2〕	1	1	1	2
	節足動物 〔 2〕	1	1	1	2
	そ の 他 〔18〕	12	16	15	11
	合 計 〔35〕	23	26	23	24
主な出現種	軟体動物	マガキ	マガキ ムラサキイガイ	—	ムラサキイガイ
	環形動物	カンザシゴカイ科	—	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイ科
	節足動物	タテジマフジツボ	タテジマフジツボ	タテジマフジツボ	<i>Balanus</i> 属
	そ の 他	チギレイソギンチャク ヒドロ虫綱 尋常海綿綱 イトマキヒトデ 苔虫綱 アミコケムシ科	チギレイソギンチャク 尋常海綿綱 ホウキムシ科 苔虫綱 ユウレイボヤ属 イトマキヒトデ アミコケムシ科	チギレイソギンチャク ヒドロ虫綱 苔虫綱 ユウレイボヤ属 アミコケムシ科 イトマキヒトデ	チギレイソギンチャク ヒドロ虫綱 マメイタボヤ属

(注) 1. 出現種類数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種類数を示す。

2. 主な出現種は、各現地調査地点のいずれかの区画で被度の最大が 10%以上又は出現個体数の最大が 100 個体/m²以上のものを記載した。

② 枠取り調査

枠取り調査による付着生物（動物）の季節別出現状況は、表 5. 12. 36 に示すとおりである。

四季を通じた総出現種類数は126種類であり、冬季が94種類、春季が85種類、夏季が53種類、秋季が61種類であった。主な出現種は、軟体動物のムラサキイガイ、コウロエンカワヒバリガイ、ウスカラシオツガイ、環形動物のカサネカンザシゴカイ、節足動物のヨーロッパフジツボ、その他のイソギンチャク目等となっている。

表 5. 12. 36 付着生物（動物・枠取り）の季節別出現状況

項 目		調査時期			
		冬 季	春 季	夏 季	秋 季
出現種類数 [126]		94	85	53	61
出現 個体数 (個体/0.06 m ²)	軟体動物	5,979	61,881	7,567	14,662
	環形動物	8,053	4,194	2,575	7,051
	節足動物	4,747	2,210	14,508	12,234
	その他	6,305	5,949	1,278	2,498
組成比率 (%)	軟体動物	23.8	83.4	29.2	40.2
	環形動物	32.1	5.6	9.9	19.3
	節足動物	18.9	3.0	56.0	33.6
	その他	25.1	8.0	4.9	6.9
主な 出現種 (%)	軟体動物	コウロエンカワ ヒバリガイ (8.0) ウスカラ シオツガイ (7.6)	ムラサキイガイ (78.6)	コウロエンカワ ヒバリガイ (20.0)	コウロエンカワ ヒバリガイ (24.9) ウスカラシオツガ イ (14.7)
	環形動物	カサネカンザシ ゴカイ (23.5)	—	アシナガゴカイ (7.5)	カサネカンザシ ゴカイ (8.8) アシナガゴカイ (5.0)
	節足動物	ウミミズムシ (7.0)	—	ヨーロッパフジツボ (50.2)	ヨーロッパフジツ ボ (8.2) クビナガワレカラ (5.6) アメリカフジツボ (5.4) タテソコエビ属 (5.1)
	その他	イソギンチャク目 (14.0) タテジマイソギ ンチャク (7.5)	—	—	イソギンチャク目 (5.9)

- (注) 1. 出現種類数の〔 〕内の数値は、四季を通じた総出現種類数を示す。
2. 組成比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。
3. 主な出現種の()内の数値は、総出現個体数に対する組成比率(%)を示す。
4. 主な出現種は、組成比率が5%以上のものを記載した。

(vi) 重要な種の分布及び特性

重要な種の選定基準により、表 5. 12. 37 に示す 9 種の重要な種が抽出され、その確認状況は、表 5. 12. 38 に示すとおりである。

表 5. 12. 37 現地調査で確認された重要な種

No	調査項目	分 類		確認時期				重要な種の選定基準				
		科 名	種 名	冬季	春季	夏季	秋季	①	②	③	④	⑤
1	魚卵・稚仔魚	アユ	アユ				○					NT
2	底生生物	ハナギンチャク	ムラサキハナギンチャク	○							減少	DD
3		ワカウラツボ	イリエツボ	○	○					CR+EN		
4		マルスダレガイ	ヒメカノコアサリ	○	○							NT
5		ツバサゴカイ	ツバサゴカイ	○						EN		VU
6		オサガニ	オオヨコナガピンノ	○						EN		
7	付着生物（動物）	イタボガキ	イワガキ	○	○						減傾	
8		シリス	カキモトシリス	○								VU
9		ドロクダムシ	ウエノドロクダムシ	○	○	○	○					DD
計	－	9 科	9 種	8 種	4 種	1 種	2 種	0 種	0 種	3 種	2 種	6 種
								9 種				

（注）重要な種の選定基準は、表 5. 12. 25 に示すとおりである。

表 5. 12. 38(1) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
魚卵・稚仔魚	アユ		令和 2 年秋季調査時に確認された。St. 1 において 5 個体が確認された。
底生生物	ムラサキハナギンチャク		令和 2 年冬季調査時に確認された。St. 1 において 2 個体、St. 2 において 1 個体が確認された。
	イリエツボ		令和 2 年冬季調査、春季調査時に確認された。冬季は St. 2 において 1 個体が、春季は St. 4 において 1 個体が確認された。
	ヒメカノコアサリ		令和 2 年冬季調査、春季調査時に確認された。冬季は St. 3 において 2 個体が、春季は St. 1 において 4 個体、St. 2 において 1 個体、St. 3 において 1 個体が確認された。
	ツバサゴカイ		令和 2 年冬季調査時に確認された。St. 4 において 1 個体が確認された。

表 5. 12. 38 (2) 重要な種の確認状況

確認種		写 真	確認状況
底生生物	オオヨコナガピンノ		令和 2 年冬季調査時に確認された。冬季は St. 3 おいて 1 個体が確認された。
付着生物 (動物)	イワガキ		令和 2 年冬季調査、春季調査時に確認された。冬季は St. 8 において 1 個体が、春季は St. 8 において 2 個体が確認された。
	カキモトシリス		令和 2 年冬季調査時に確認された。St. 6 において 12 個体、St. 8 において 8 個体が確認された。
	ウエノドロクダムシ		令和 2 年冬季調査、春季調査、夏季調査、秋季調査時に確認された。冬季は St. 6 において 129 個体、St. 7 において 434 個体、St. 8 において 113 個体が、春季は St. 6 において 51 個体、St. 7 において 75 個体、St. 8 において 21 個体が、夏季は St. 6 において 38 個体、St. 7 において 95 個体、St. 8 において 3 個体が、秋季は St. 6 において 182 個体、St. 7 において 505 個体、St. 8 において 26 個体が確認された。

(2) 建設工事に伴う影響の予測及び評価

建設工事に伴う影響の予測及び評価は、土地の改変を対象に実施した。

(a) 予測概要

土地の改変に伴う海域動物の予測内容は、表 5. 12. 39 に示すとおりである。

表 5. 12. 39 予測の内容

予測項目		予測方法	予測範囲	予測時期
土地の改変	海域動物の生息環境及び重要な種への影響	事業計画の内容、水質・底質の現地調査結果及び水質予測結果等をもとに推定	事業計画地周辺の海域	工事中

(b) 予測方法

土地の改変に伴う海域動物の生息環境への影響の程度について、海域動物の現地調査結果、環境の保全及び創造のための措置を踏まえ、工事計画、水質・底質の現地調査結果、水質予測結果等をもとに、海域動物の生息環境及び重要な種への影響を定性的に予測した。

(c) 予測結果

(7) 海域動物の生息環境への影響の予測結果

事業計画地周辺の海域（夢洲の北側海域）の水質・底質は、「5. 3 水質・底質」の調査結果で示すとおり、概ね周辺海域と同様の傾向となっており、当該海域一帯が同様の水質・底質であると考えられる。この状況を反映し、現地に生息する海域動物は、そのほとんどが大阪湾でよく見られる種となっている。

公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、水質汚濁防止法、大阪府生活環境の保全等に関する条例の排水基準を満足させるよう、濁水処理施設、沈殿池で管理して、雨水管により海域へ排水する計画である。また、工事中のし尿については、水質汚濁防止法、大阪府生活環境の保全等に関する条例の排水基準を満足させるよう、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りにより、周辺のし尿処理場へ搬出する。

なお、係留施設の整備工事では、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。

したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。

以上のことから、土地の改変に伴う海域動物の生息環境への影響は小さいものと予測される。

(イ) 重要な種への影響の予測結果

重要な種への影響の予測結果は、表 5. 12. 40 に示すとおりである。

表 5. 12. 40 (1) 重要な種の予測結果

予測対象種	アユ
生態の概要 ¹⁾	【分布】日本列島全域 【生態】河川で産卵し、孵化した仔稚魚は海や湖へ降下するが、再び河川へ遡上して産卵する両側回遊魚である。仔稚魚は海では一般に沿岸部に生息し、夜は表層に、昼は低層に分布して有機物破片や半底生の浮遊動物を食う。
確認状況	令和 2 年秋季調査時に確認された。魚卵・稚仔魚調査により St. 1 において 5 個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事では、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うアユへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	ムラサキハナギンチャク
生態の概要 ²⁾	【分布】本州中部～九州の内湾 【生態】砂浜の干潮線付近に普通にみられる。体壁は平滑で腺細胞が多く、体外に分泌物を出し、分泌物は刺胞、泥土、他動物の小破片とともに陶着して鞘管を形成する。縦走筋はよく発達して収縮自在である。
確認状況	令和 2 年冬季調査時に確認された。底生生物調査により St. 1 において 2 個体、St. 2 において 1 個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うムラサキハナギンチャクへの影響は小さいものと予測される。

(注) 1. 出典は、「原色日本淡水魚図鑑 全改定新版」(保育社、平成元年)である。

2. 出典は、「原色検索日本海岸動物図鑑〔I〕」(保育社、平成 4 年)、「新日本動物図鑑〔上〕」(株式会社北隆館、昭和 63 年)である。

表 5. 12. 40(2) 重要な種の予測結果

予測対象種	イリエツボ
生態の概要 ¹⁾	【分布】東京湾・能登半島～九州 【生態】大規模な内湾奥部の潮下帯水深5～10mの軟泥底に生息。全国的にも産出例は極めて少なく生息状況に関する情報は乏しい。シズクガイやチョノハナガイが好むような比較的酸素の乏しい還元的環境に見られる。
確認状況	令和2年冬季調査、春季調査時に確認された。底生生物調査により冬季はSt. 2において1個体が、春季はSt. 4において1個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うイリエツボへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	ヒメカノコアサリ
生態の概要 ²⁾	【分布】房総半島以南 【生態】潮間帯下部から水深20mの内湾の砂泥底に生息し、中内湾性の環境指標種として知られる。懸濁物食者である。
確認状況	令和2年冬季調査、春季調査時に確認された。底生生物調査により冬季はSt. 3において2個体が、春季はSt. 1において4個体、St. 2において1個体、St. 3において1個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うヒメカノコアサリへの影響は小さいものと予測される。

(注) 1. 出典は、「干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック」(東海大学出版会、平成24年)、「レッドデータブック2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－6貝類」(株式会社ぎょうせい、平成26年)である。

2. 出典は、「日本近海産貝類図鑑(第二版)」(東海大学出版部、平成29年)、「環境と生物指標2(水界編)」(共立出版株式会社、昭和50年)、「Spatial variation in organic matter utilization by benthic communities from Yura River-Estuary to offshore of Tango Sea, Japan」(Emily S. Antonio, Akihide Kasai, Masahiro Ueno, Nam-il Won, Yuka Ishihi, Hisashi Yokoyama, Yoh Yamashita, Estuarine, Coastal and Shelf Science 86:107-117, 2010)である。

表 5. 12. 40(3) 重要な種の予測結果

予測対象種	ツバサゴカイ
生態の概要	【分布】北海道～九州 【生態】砂泥中に埋れしU字状の棲管を造る。棲管中で水中の懸濁物を濾過している。干潟～潮下帯（水深20m以浅）に生息。棲管中にはしばしばオオヨコナガピンノやラスバンマメガニ等が共生している。虫体を刺激すると強く発光する。現在健全な個体群が残っている場所は限られていると考えられる。
確認状況	令和2年冬季調査時に確認された。底生生物調査によりSt. 4において1個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うツバサゴカイへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	オオヨコナガピンノ
生態の概要	【分布】東京湾、相模湾、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、九州 【生態】砂泥底～砂底に生息するツバサゴカイの棲管内に共生する場合がほとんどであるが、甲幅10mmに満たない小型個体がフサゴカイ類の棲管内から得られた例もある。第3歩脚先端が非常に鋭く、ツバサゴカイの頑丈な棲管を切り裂いて侵入、脱出する。同属のオヨギピンノと同様に、歩脚を用いて遊泳することがある。分布域は比較的広いが、個体数は多くない。宿主であるツバサゴカイの生息する干潟が減少傾向にあり、生活史の一部をツバサゴカイに依存する本種の生息環境も危惧される。
確認状況	令和2年冬季調査時に確認された。底生生物調査により冬季はSt. 3において1個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うオオヨコナガピンノへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック」（東海大学出版会、平成24年）である。

表 5. 12. 40(4) 重要な種の予測結果

予測対象種	イワガキ
生態の概要 ¹⁾	【分布】青森県陸奥湾以南の全国（太平洋と日本海の両沿岸） 【生態】外洋側の岩礁、干潮線の下から水深約20mの所まで生息する。付着できる器質としては岩、コンクリートが挙げられる。マガキ等の他のカキ類と同様に固着生活を送るため、殻形は一定しないが、一般には長楕円形で、殻質は堅固で厚い。
確認状況	令和2年冬季調査、春季調査時に確認された。付着生物（動物）調査により冬季はSt. 8において1個体が、春季はSt. 8において2個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うイワガキへの影響は小さいものと予測される。
予測対象種	カキモトシリス
生態の概要 ²⁾	【分布】本州中部以南 【生態】岩礁性～転石海岸の低潮線付近に生息し、尾部に娘個体を付加して無性的に増殖する。カキ殻の間の泥の中に多い。
確認状況	令和2年冬季調査時に確認された。付着生物（動物）調査によりSt. 6において12個体、St. 8において8個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うカキモトシリスへの影響は小さいものと予測される。

（注） 1. 出典は、「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック（水産庁編）」（社団法人日本水産資源保護協会、平成10年）、「日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅰ）」（社団法人日本水産資源保護協会、平成6年）である。

2. 出典は、「環形動物 多毛類」（生物研究社、平成4年）、「原色検索日本海岸動物図鑑〔Ⅰ〕」（保育社、平成4年）である。

表 5. 12. 40 (5) 重要な種の予測結果

予測対象種	ウエノドロクダムシ
生態の概要	【分布】和歌山県、大阪府、瀬戸内海、高知県、福岡県玄界灘側、西九州 【生態】垂直分布は低潮亜帯～上浅海帯(水深20～30m)であり、生息域は砂地性、礫性、岩礫性、殻上や海藻上である。北海道～九州の海岸、岩礫の石の下や海藻の間などに多く見られる。
確認状況	令和2年冬季調査、夏季調査、秋季調査、春季調査時に確認された。付着生物(動物)調査により冬季はSt. 6において129個体、St. 7において434個体、St. 8において113個体が、春季はSt. 6において51個体、St. 7において75個体、St. 8において21個体が、夏季はSt. 6において38個体、St. 7において95個体、St. 8において3個体が、秋季はSt. 6において182個体、St. 7において505個体、St. 8において26個体が確認された。
予測結果	公共下水道整備前において、事業計画地内で発生した工事排水は、濁水処理施設、沈殿池で管理して雨水管により海域へ排水する計画である。工事中のし尿については、仮設浄化槽で処理して水質管理を行った上で雨水管により海域へ排水するか、汚水の排水量が少ない期間については汲み取りを行い、周辺のし尿処理場へ搬出する。 係留施設の整備工事により、本種の生息環境の一部が改変される可能性があるものの、改変範囲は係留施設の基礎部分のみを想定していることから、水質・底質への影響は限定的であると考えられる。 したがって、土地の改変に伴う水質・底質への影響は小さいものと予測されている。 以上のことから、土地の改変に伴うウエノドロクダムシへの影響は小さいものと予測される。

(注) 「生態の概要」の出典は、「増補改訂瀬戸内海の生物相Ⅱ」(広島大学理学部付属向島臨海実験所、昭和63年)、「新日本動物図鑑〔中〕」(株式会社北隆館、昭和40年)、「ヨコエビガイドブック」(海文堂出版株式会社、令和4年)である。

(d) 評価

(7) 環境保全目標

土地の改変に伴う海域動物の環境保全目標は、表 5.12.41 に示すとおりであり、本事業の実施が事業計画地周辺の海域に及ぼす影響について、予測結果を環境保全目標と照らし合わせて評価した。

表 5.12.41 環境保全目標

環境影響要因	環境保全目標
土地の改変	・ 環境への影響を最小限にとどめるよう環境保全について配慮されていること。 ・ 法令を遵守するとともに、国、大阪府及び大阪市の自然環境に関する計画又は方針に定める目標の達成と維持に支障を及ぼさないこと。 ・ 事業計画地周辺における海域動物の生息環境に著しい影響を及ぼさないこと。 ・ 事業計画地周辺における海域動物の生息環境の創出に配慮していること。

(4) 評価結果

土地の改変に伴う海域動物への影響は、予測結果に記載したとおり可能な限り低減されているものと予測される。

さらに、事業の実施にあたっては、以下の環境保全対策を実施することにより、土地の改変に伴う影響を最小限にとどめるようにする計画である。

- ① 工事中に、公共下水道が利用可能になる予定であり、工事排水及びし尿については公共下水道整備後は下水道へ排水することで、海域への環境影響を回避する。
- ② 係留施設の整備において、濁水の発生に配慮した施工に努めるとともに、必要に応じて汚濁防止膜を設置する等の保全措置を行う。

以上のことから、本事業の実施が海域動物に及ぼす影響は、最小限にとどめるよう環境保全について配慮されており、環境保全目標を満足するものと評価する。